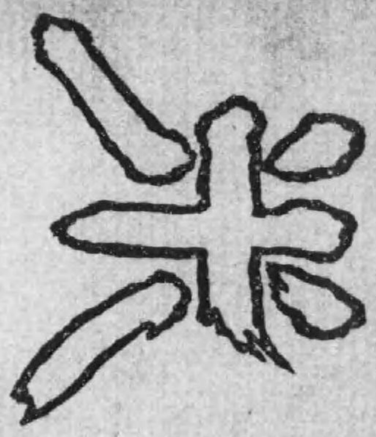
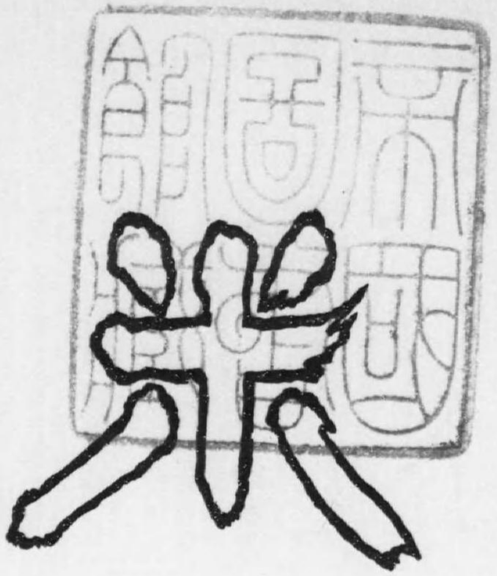


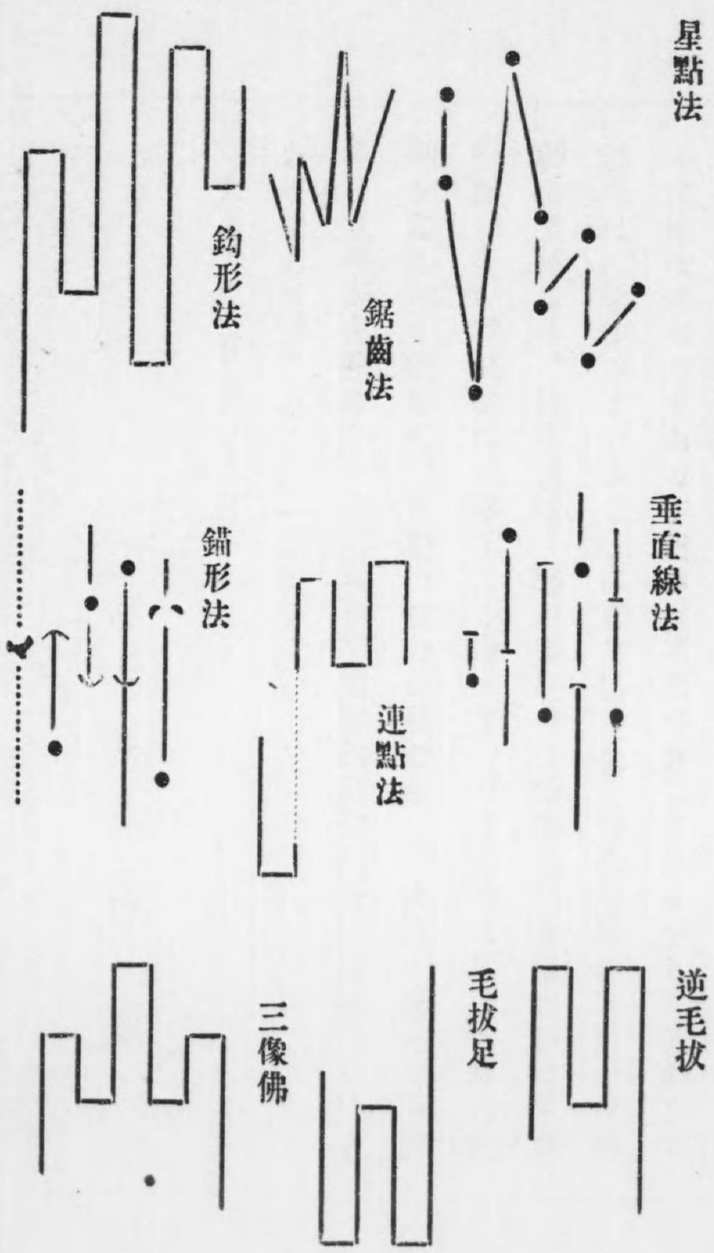
#7115
55



4ｷ115
55

大正
15. 10. 25
内交

◇罫線圖◇



手前味噌のやうであるが内容は可成充實してゐるつもりである。然しほんを作るといふことに就ては、全く豫備知識がなかつた爲纏めて見ると、自ら遺憾の點が多い、この事は讀者諸氏のお了解を願い度い、只茲にお斷りして置き度いのはこのほんは難解的辭句をなるべく避けて、普通一般のお話の如く、何人が讀んでも直ちに意得が出來るやうに、極めて通俗的知識涵養に努めたといふことである。

大正十五年十月

落花識

自序

このほんは、私が個人としての研究資料として、蒐集したものを綜合したものであつて、元々公開する考はなかつたのであつたけれど、友人諸氏から強て公開するやうにとの勸誘があつたことゝ且又、同好米相場の研究者が適當の參考書がない爲、高い代價を拂つて、米相場の奥傳とか、秘傳とか謂つた部分的の研究をやつて居らるゝといふことも耳にしてゐる爲、それ等の同好諸氏へ私の知つてゐるだけお讓りしても惡くないといつたやうのことから實費さい出ればよいといふ考へでおわけすることを企て、毎日日沒前の研究時間を利用して、遂に出版する運びになつたのである

米目次

一、米相場とは何か？　一
二、米相場の必要　四
三、米相場と賭博の異なる點　六
四、米穀取引所の濫觴　八
五、取引所と取引員　一〇
六、取引所の立會と中止　一四
七、標準米と格付　一六
八、米相場の賣買方法　一八
九、米相場の思惑　二〇
十、新規賣買と手仕舞　二五

十一、米相場は怎う動くか　二八
十二、需要供給と米相場　三一
十三、順乘、變乘と米相場　三四
十四、人氣の消長と相場觀　三六
十五、季節と相場の關係　四四
十六、相場高低の割合　五三
十七、米相場と鞘關係　五四
十八、相場の大勢と目先觀　五八
十九、場面觀と足取　五九
二十、足取の種類と觀方　六二
廿一、保合相場の解說　六四
廿二、往來相場の解說　六九

廿三、ヂリ相場の解說　七〇
廿四、關節相場の解說　七二
廿五、通ひ相場の解說　七三
廿六、伸び相場の解說　七四
廿七、樣變り相場の解說　七五
廿八、天井と底値の觀測　七八
廿九、米相場の極意と秘傳　八〇
附賣買の駈引
い、賣出動の時機　八一
ろ、買出動の時機　八二
は、賣買休止の時機　八四
三十、相場の金言と諺語の解說　八五

冊一、天候豫測法　九四
冊二、各種の相場觀測法　一〇〇
　い、易と九星術　一〇一
　ろ、干支と五行法　一〇二
　は、數理の觀測　一〇四
　に、循環法　一〇五
　ほ、五行星座法　一〇六
冊三、市場用語の解説　自一〇八至二〇二
附　錄
　一、取引所法　一
　二、取引所令　一四
　三、取引所令施行規則　二二
　四、取引所税法　三二
　五、取引所税法施行規則　三八

米

池田落花著

一、米相場とは何か

こゝに述べる米相場とは、主として期米相場のことで普通に米相場と謂つたら定期米相場を意味することになる、現今では米穀長期清算取引といふ名稱になつてゐるけれど、定期即ち、期米相場といふ方が慣習上却てわかりよい、以前は投機と云へば米相場のことで、即ち米が投機思惑の主體となつてゐたのであるが、時運の變遷と共に國勢の勃興となり、輓近著しく國民の投機心を刺戟し逐次投機熱が旺盛を極むる爲、各種方面に向つて投機的の發達を見ることになり、株式、綿

……（一）……

糸、生糸及び其他色々の方面に於て有利なる思惑の開發を見出されたので、米相場に對する思惑は何となく時代遲れの感もある樣であるが、之は畢竟するに時代思想の變化による所で、自然的傾向と見る外はない、又實際に於ても米相場の思惑は可成繁雜の手數がかゝり、且又可成の短所も介在して居るのであるから、今日に於ては米相場を主體的の思惑物とするには、餘りに迂遠の感がないでもないそこへ行くと株式などは便利なもので、一枚の委任狀さい添付したならば、何百何十萬圓でも瞬間のうちに受渡が完了さるゝといふ事になる、かゝる便利の思惑物があるのに、繁雜の手數をかけて、米相場を遣るといふことは一寸錯誤してゐると謂つてゐる人もあるが、こは餘り皮相の觀測に囚はれた說で、米相場には又米相場の特長があることは云ふ迄もなく、殊に米は我國民の主食で、私共御同樣が生命を繫いで行くべき大切のものであるから、この米の高低騰落の研究は決して等閑に付すべきものではない、之は我國が存在して行く限り、國民が存在してゐる限り、未來永劫退步するものでなく、否寧ろ進步して行かなければなるまいと考へらるゝ。

……（二）……

米は一年草であるから、それだけ、年々歲々の需供全体が異なり、從てそれに伴ふ變化消長に興味が多い事は思惑物として、敢て株式其他に讓らぬ、米は米の獨自的特長が逐年發揮することは爭ふ餘地はないと思ふ。

期米とは、一定の市場に於て、一定の期限を約束し、取引所法の定むる所によつて、豫め賣買する米のことで、この賣買行爲が卽ち、米相場の値段の事に當るのである。

期米受渡の時期は毎月の月末で、當月限、中月限、先月限といふ三限月立つてゐるが、この三箇の限月といふのは、假令ば曆の一月の場合は一月限と二月限、三月限と立ち、二月ならば二月限、三月限、四月限といふ工合に、何時でも循環的に立つのである、又年度が跨がつても速續的であつて十一月の場合は十一月限、

……（三）……

十二月限、一月限といふ風に立つわけである、この限月の稱呼は略して當限、中限、先限と唱へ、又單に當、中、先とも謂つてゐる、而して當は當月の下旬、中は翌月の下旬、先は翌々月の下旬に於て受渡となるは前に述べた通りである、併し期米は其約束した賣買によつて受渡しとなる數量は至つて不足で大部分は其受渡期限前に於て、賣つたものは買戻され、買つたものは賣埋めの相殺となる米が多く、結局利益があれば差金だけを受取り、損失があれば差金丈け支拂ふといふのが所謂米相場の普通とされてゐる、この差金受授に賣買を完了する行爲は轉賣買戻と稱して頗る巧妙なる手段である。

……（四）……

二、米相場の必要

相場と一口に言へば直ちに賭博的の不正行爲でもあるかのやうに感違ひして、一種の罪惡の如く考へてゐる人もあるが、相場の精神は決してそんなものではない、これは社會の經濟狀態が進歩すればするほど其必要が起つて來るもので、敢て米相場に限つたわけでなく、必ず無くてはならないものである。定期相場の行はれてゐない總ての商品は、其市價が必ず不確定で、高低の變動が甚だしいものであるが、定期取引相場の行はれてゐる商品は其市價の動搖する差が比較的少ない、それは何故かといふに、取引所といふ調節の機關があつて、賣買の標準が定まり市價の高低する動搖點を明瞭に指針し、簡單に且容易に相場の公平が實行されてゐるのだから、甚だしい騰落の差が生じない。相場をする人々が現在の物價が高いと考へて賣るのは、將來安いといふ觀念があるからで、現在の物價が安いと考へて買ふのは先へ行つてから必ず高くなるといふ見解を以て居る關係からであつて程よく相場の釣合がとれる。凡ての商品に一定の標準を示す機關がなかつたならば、全く中心がとれない、機關があつてはじめて其標準がとれ、それを中心として需要供給の調節が出來る、標準があれば決して經濟界を動亂させるやうな大變

……（五）……

動は起らない、米相場の必要は卽ちこゝにある。

三、米相場と賭博の異なる點

世間一般では、米相場を目して直ちに賭博の如く早合點する人が多く、中には自己が相場をやつて居りながら賭博をやつてゐるやうに考へて居る者もある、これ等は甚だしい錯覺であつて、自己幻惑に囚はれ過ぎる者といはなければならない然らば相場と賭博の相違點は怎うであるかといふに、(1)相場をやる意志が米卽ち現物を受渡するのであるかドウか、又は其目的が經濟界に効果を齎らすかドウかと云ふ事によつて區別するもの、(2)損益額が豫め確定的であるかドウかといふ點によつて區別するもの、(3)賣買取引に一定の方針及び計算があるかドウかと云ふ事によつて區別せんとする各說があるが、元來投機とは其目的物が實際に接合するかドウかといふことに拘はらず、各自の判斷力の優劣に依つて其市

價の差額を利得せんとする行爲が相場取引で、賭博は是と異なり、或る偶然の出來事によつて、金錢を受授するものであるから賣買行爲とは云へ得ない、卽ち取引所に於ける轉賣買戻の如きものが投機で、場外に於ける合百、直キの如きものは賭博といふことになる、要するに投機も賭博も將來の發生事實を目標として輸贏を爭ひ、危險を冒すといふ所に類似點はあるが、投機は個人的營利を認められてある我經濟上に於て避く可らざる行爲であつて、生產的手段の一つであると云へ得るが、賭博にあつては、一方の利得に對し、他者の損失が必ず合致すべき性質を有してゐる、投機は必ずしもさうでなく通常の賣買と同じやうに、當事者の悉くが利益を獲收し、又は其悉くが損失するといふ性質の相違がある、之を半たく述べると賭博は偶然に起る出來事によつて其勝敗を決するのであるけれど、相場の損益を生ずべき原因は各人判斷力の差異によつて定まり、賭博にあつては其勝敗から生ずる損益の額が始めから極つてゐるに反し、相場の方は其損益の差額

が全然不明であるといふことに相異點がある。

……（八）……

四、米穀取引所の濫觴

徳川氏執政時代に於て米相場の最も旺盛であつた土地は大坂であるが、時代の推移と共に、各地の取引所興廢があり、其中に最も古く、且つ最も盛大であつたのが堂島の市場であつた、其他享保二十年（百九十年前）には京都及び大津の御用米會社が特許され、江戸に於ては夫より古く、享保十四年の米延賣切手注文取次所が出來、其他各地共可成の米相場取引機關が出來たのであつたけれど、大概中絶して、稀に明治年代まで、繼續して來たものもある、以上の外には赤馬關（馬關）桑名、松坂（伊勢）、高岡、金澤、鶴ケ岡、酒田、新潟等にも古くから相場會所なるものがあつた。其うちの一番古い大坂の米市場は何時頃から起つたか、文献の明瞭したものはないが、凡そ幕政時代の諸代名が藏屋敷を、こゝに構へて米穀其他の國産品を大坂に輸送した事と、其藩士をして販賣事務を採らしめた所謂藏役人（藏元）時代から、この特權を出入の町人卽ち、札差といふものに委托した模樣から考察して見ると、凡そ寛永年度頃から創始されたものであるといふ説である其當時町人藏元の有力なる者は淀谷辰五郎（淀辰といふ）といふ者で、前記大坂屋敷の切手を利用して、米の定期賣買を始め、米市と稱して同業者を集め、彼淀辰の店舗内に於て空米相場を行ふたといふ事が傳へられてある。

然るに當時の米價は非常に騰貴して、この定期行爲に依り、一層甚だしき變兆を釀したといふ非難が高くなつたので、官憲は一時禁止命令を發して之を威壓したけれど、彼等は其命に服せずして、密かに米市を立て、相場の高低を爭ふてゐた之か淀谷の米市と云はれ、期米相場の濫觴であると傳へられてゐる。

元錄九年淀谷辰五郎が驕奢の爲め官憲の咎めを受け闕所となつた後ちも大坂の米商人は、この跡に集合し、依然米穀の長期賣買を持續して居たさうであつて、そ

……（九）……

れが今日の堂島取引所の前身であるといふのだから、堂島の米市場が我國で第一番に古い。

……(一〇)……

現今模範的米市場といはるゝ新潟米穀取引所の沿革も可成古いもので、今を去ること百八十年の昔の享保年間に其因を發して居り、具体化した市場となつたのは寛政五年からだといふのである、當時は新潟相場所といふものが許可され、降て明治初年に於て、其相場所が穀物賣捌所と變更され明治九年米商會所條例の發布と共に、新潟米商會所の創立を見たのであつて、これが現在の新潟米穀株式取引所の前身である、この取引所に關しては可成面白い資料もあるが、本書の目的は別にあるのであつて茲に詳說するを得ないから、時機を見て書て見たいと思つてゐる。

五、取引所と取引員

米穀取引所は國民經濟上の施設として色々の機能を有するのであつて、米穀の大量取引に便し、又米穀の價格に對する平準作用或は保險作用をなし、公定相場を作成する等の事によつて我經濟上必須の機關である。凡そ米相場を遣るには一定の米市場卽ち米穀取引所へ行かなければならぬのであるが取引所へさい行けば誰でも勝手に相場が遣れるかといふに、それはやるにはやれるが、取引所と直接に賣買をやるといふことは出來得ないのであつて、直接の賣買行爲は、市場所屬の取引員(舊稱仲買人)の業務であるから、誰でも勝手に相場かやれると云つても、其間には必ず取引員が介在して居らなければならないわけで、客方卽ち一般の賣買者は、何れも其取引員に委托せなければならぬのである、尤も取引所へ往つて見ると仲買人以外の者が賣買をやつてゐるのも見受けるが、之等は皆取引員の店員で、取引員の代理權を委任された市場代理人とか、場立ちといふ者で、それ以外の者の直接賣買といふものは絶對に許されてゐない。外國の取引所では、我國

……(一一)……

と異なつて、總て會員組織になつてゐるから、會員及び仲買人の二種の人が賣買權を有してゐるけれど、我國では、最近認許された、小樽の商品取引所を除いては外に米穀取引所の會員組織といふものはないから、普通賣買取引の權利を有してゐるものは取引員だけと見て置てよい。

然らば何が故に取引所の直接賣買は取引員に限られてゐるかといふに、元來取引所の賣買は頗る紛糾錯雜を釀し易く、經驗のない人々の到底成し能はざる困難が多く、わけて其取引の履行、若くは精算を行ふといふ事は甚だ複雜であるから、所詮局外の人に正確な賣買が出來難いといふ見地もある、殊に我米穀取引所の如き賣買方法が、相對性のものでなく、主として競賣買、或は、糶糴賣買の方法を採用してゐることゝ、轉賣買戻が出來る關係から、其賣買の整理及び計算が多岐多端で、且又税金の取扱法などが隨分面倒でもあり、其他市況の活躍、波瀾時代に於ては混亂紛糾を生ずることが多いのであるから、從て賣買上完全の行爲

が出來得ないといふ場合も起り易く、又取引所としても、諸種の義務を強要する事が困難で、常に損害の賠償が起るやうな事もあるといふ複雜の關係があるので營利を目的とする取引所が、かやうの煩雜に堪へ得る所でないのであるから、取引所法(附錄參照)に於てこの直接賣買に携はる一定數の取引員を設けて置くのである、隨て取引員の取引所に對する責任は極めて重く、現在の取引所法に於て其權利義務を明瞭に規定してある、取引員が市場卽ち米穀取引所に於て賣買した行爲は自己のものはいふ迄もなく他者(客方)から委托になつたものであつても、取引所に對して其責任を負はなければならない事は勿論で、前に述べた如く、賣買は主として競賣買によるものであるから、或は一人の爲す賣又は買の相手方は相對性の賣買と異つて必ずしも一人ではない、或時は二人のこともあるし、又三日以上、數人のこともある、且つ賣買は互に轉賣買戻の方法で相殺された殘部が同數の米である筈であるから、表面では賣方と買方に分れて對峙してゐても、其

相殺された建米の差金は、全部取引所が相互の代表者となつて受拂するものである、それ故に取引所が、各賣方又は買方の相手方のやうに觀ゆるのである、言へ替れば、取引所の賣買は轉賣買戻の關係によつて常に相殺されて行くから、最初の相手方は必ず將來の相手方でなく、常に取引所が相手方の形態にあつて、其賣買取引上の責任を負はねばならぬといふ事になるのである、取引員は之に依つて其賣買が自己のものであらうと又は、委托者のものであつても、市場に建米を有する以上は勿論のこと、手仕舞切上げをした時に於ても其差金の計算を爲し、又受渡の場合には夫々其義務を履行せなければならないといふことになる。

六、取引所の立會と中止

米穀取引所に於て取引員又は其代理人が、一定の時間に於て、取引所内に設置されてある區劃内に參集して賣買取引を行ふことを立會と謂ふのであるが、其立會

は普通毎日午前と午後の二回に行はれ、午前の立會を前場、午後の立會を後場と稱する、而して前場立會の最初を寄附又は前寄と唱へ、後場の最初立會を後寄といふのである、又前場最後の立會が前止め、後場最後の立會を大引或は引といふのであるが、地方によつては寄附、中引、大引、など〻區別してゐる取引所もあるが大体は前後場の寄附及引の二種を唱ふる取引所が多い、又前場、後場の中にも數回の立會が行はれるが普通で、其回數毎に一節、二節と稱して「節」を設けて置く、假令ば前場一節は午前九時から、二節は九時三十分からといつた工合で、後場も同樣一節、二節と「節」が立ち回數は地方に依つて異なるが少なくも前場五節後場五節以上を設けて置く市場が多い。取引所の立ト は休日（日曜、大祭日及年末年始の七日間）を除いては休止することがないが、相場激變の爲め市場の秩序を保てない狀態に陷つた場合、假令ば亂手を振つて不穩な賣買行爲をしやうとした者などがあつた時は立會を中止することがある、又追證據金の未納の爲め一

時中止することもある、其他當局からの命令などにも依つて中止することがあるが、かやうな事は至つて稀で、大抵は取引所理事者に於て自衛上中止することが多い、或は又當限だけ中止して、中限と先限を立會ふ場合、當限と中限を中止して先限の立會を繼續してゐる場合もある、之を一部中止といふ

……(一六)……

七、標準米と格付

米穀取引所は日本内地の産米は勿論、其他朝鮮、臺灣米及び外國米にあつても、總じて標準米を設けて、各其格を定めて置かなければならぬ必要がある。又同じ内地米でも新米と古米の別、或は一等米もあれば三等、四等米もあるのであつて又は米質の低級である臺灣米、朝鮮米もあるといふ風で中々一通りや二通りでない、これが普通の正米現物賣買であれば、假令雜多の米を取扱ふといふことでも格別不便を感ずるやうなことはないけれど、期米相場の目的といふものは現品受渡に限つたものでなく、寧ろ現品を、一種の有價證券か手形の如く見做して、其賣買から生れてくる差金受授が大きな目的となつてゐるのであるから、其標準物件を一定して置くといふことは、極めて必要があるわけで、且又、各市場では各國各種の品質も價格も相違のある米を取扱ふといふことは、實際に於て不可能である、かやうの見地からして、標準制を設けたのである。

定期標準米の條件としては、最も適當の資格を具備した米が選擇され、各市場何れも代表物として定められてゐるのである、假令ば東京市場では武藏國産の中米大坂市場では攝津産の中米、新潟市場では越後産三等檢査米といつた工合に、一定の標準米が定まり、この標準米を尺度として各米の位付けをしてゐる、即ち標準米と他の産米又は代用米及び其米質の良否を鑑査して、標準米より品位が高いか或は低いかといふことを定めるのである、之を格付と稱するのであつて、この格付により標準米より品位の優等なる米は格上げとなし、品位の劣る米は格下げ

……(一七)……

を付けるのであるが、格上米を受渡米として提出した場合にあつては、定められただけの格差金を受取り、其反對に格下げ代用品を提供した場合には、格下げだけの差金を添付し、そして受渡の圓滑を計ることになる、而してこの格付は各米穀取引所が毎年改定し、全國の稻作を詮議して一表を作製する、この表を格付表といふのである。

八、米相場賣買方法

米相場賣買の方法といふのは、其約束物卽ち米の値段を定むる事で、現今取引所法によつて行はるゝ各米穀取引所の規定は(一)競賣買、(二)糶賣買、(三)相對賣買、(四)入札賣買の四方法があるけれど、實際に於ては(一)の競賣買、(二)の糶糴買の外は餘り必要がないので、何處の取引所でも以上の二方法だけさい採用して居らない。

賣買の單位は百石であつて、賣買値段の稱呼は一石を基調としてある、假令ば一石値段三十五圓五十錢とか五圓二十五錢とか呼ぶが如く値段は石であつて取引は百石である、卽ち百石を一枚と稱して賣買値段の百倍が取引の單位となつてゐるのである。

期米の賣買は株式の銘柄賣買と異なつて、一般格付賣買を採用してゐる關係から一定の標準米に對して賣買を行ひ、其格付による受渡が規定されてゐることは前に述べた通りで、定められた單位の百石以下は勿論賣買が出來ないが、百石以上は千石でも、二千石乃至一萬石一口でも賣買が成立する、併し百石以上であつても百十石とか、二百二十石といふやうな端數のつくものは賣買が成立しない、單位が百位であるから必ず百石、二百石或は千百石とか謂つたものでなければならないのであつて百以下の端數は限定しなければならない。

九、米相場の思惑

相場を試みんとするには大體確固たる眞念を以て思惑の基調を建てなければならないといふ事は當然で、例へばトげ大勢の相場であるけれど、目先若干の下げ目がある相場だから一寸賣つて目先の下げを取らふとか又は、下げ大勢相場であるが、目先幾何の上げ模樣があるから一寸買つて利を得やうなどゝいふ仕かけ方は相場道の禁物である。かゝる目先き慾の爲めに、遂には自己の眞念に迷ひが生じて來ることは免かれないのであつて、甚しきに至つては、それが爲に、本來の大方針を誤り、拔き指しならぬ羽目に陷つて仕舞ふやうの事になることが多い、目先の小利を標的として相場の思惑を行るといふことは、利益の少ないばかりでなく、危險の多い愚劣の手段といはなければならない。

相場の思惑を行るといふことに就ては必ず一般的材料の集成である大勢の歸趨を明かにしてから仕掛べきもので、仕掛けて仕舞つた上は、自己の賣買玉の爲に未練を起し、大勢に逆行するやうな行爲は最も戒むべきことである、從て其進退は飽迄大勢趨向に隨伴するといふことを忘れぬやうにせなければならない、大抵の思惑者は引かれ腰が強く利を乘せるといふことには洵に弱いといふ缺點がある、それが爲に十回思惑を行つたうち七回まで利益を收得してゐながら、あとの三回の損失の爲に、差引損となることが普通の例になつてゐる、儲けた數が七回で、損失が三回といつたならば、差引勘定は當然利得になるべき筈であるに拘はらず事實は却て之に反する結果を齎らすといふことは何故であるかといふに、思惑相場に利の乘つた場合には早く利を入れて見度いのが一般の觀念で、又損失となつてゐる場合は未練が生じて見切憎いといふ人情の弱點から、其本能力が鈍つて來るといふのが主なる原因で前途尙大きく利得する見込がある思惑でも早く利入を急ぐといふことゝ又引かれた時は萬一の相場回復を期待するが爲に不知不識の間

に深淵へ嵌り込むといふことになる。かやうの事は思惑者として充分なる研究を要すべきものである。

……(二二)……

單り米相場のみでなく株式でも、綿糸、又は生糸相場でも、之を判斷するといふことは極めて困難のことであつて、之を判斷する方法としては、或者は罫線即ち相場の足取を一點張りに目安となし、或る者は又陰陽占筮からの鑑定即ち、八卦九星などを唯一の頼みとなし、又は數理から割出した觀測、其他、人によつて種々の信念を土臺として思惑を行つて居る者もある、勿論是等も場合によつて有利のこともあるから一概に排斥すべきものでもないが、最も必要のものは四圍環況の事情、好惡諸材料を研究するといふことであつて、相場の大勢趨向が怎うなつてゐるかといふことを考へ之に伴ふ目先の判斷を誤らないやうにせなければならない、何等の研究もせず、何等の用意もなく對策もない漫然たる思惑は甚だ宜敷ない、例へば米相場が面白さうだから行つて見やうとか、或は人が買つて儲けたから俺も買つて見やうなどゝいふ散慢たる思惑は洵に惡い量見といはなければならない、又何等かに失敗して其穴埋を米相場の思惑によつて取返すといつたやうな考へから、確固たる信念も目的もない思惑は最もよくない、かやうのことで相場を行る人はまぐれ當りに當るのでなければ概して失敗に終る例が多い。

或は又チト早いけれど五六十丁は引かれる覺悟で賣つて見やうとか、買つて見やうといふ話はよく聞くことであるが、是なども戰はざるに先づ犧牲を拂ふと同一で、仕掛前から業に失敗を意味されてゐる、若し間違つたら難平にするなどゝいふ人もあるが之も危險至極である、かやうの考からの思惑なら寧ろやらぬ方が餘程確である。

それから兩建賣買即ち賣と買と兩方を行る思惑なども宜くない、この手段は相場變動の觀測がつかぬ爲、考へた窮餘の下策で、熟した方から利を喰ふなどゝいふ甘いやり方であるが、問屋はさうは卸さない、大抵は失敗に終るものであるから

……(二三)……

注意せなければならない。又値惚賣買といふ行り方も大抵怪我のもとである、元來相場は大勢と人氣とに依つて進退するものであるから、直頃などに頓着することはない、百丁上げたから躊躇するとか百二十丁下げたから停止するといふやうなことは豫め定まつてゐない事は明かの理である、隨て斯の如き思惑も大抵失敗に了る、總じて相場の思惑なるものは、偶然の出來事によつて僥倖を得やうとするやうな事は戒めなければならないのであつて、孫子の所謂「善用兵者、役不再籍、糧不三載取用於國因糧於敵、故軍食可足也」といふ作戰篇などは味ふ可きことである。

……(二四)……

然らば如何なる時機に於て相場の思惑を爲すべきかといふに、そは後に述ぶる場買掛引注意事項に就て意得された方がよいのであつて、要するに、相場騰落の依て起る理を討ね、其諸材料を研究するといふことが第一の條件である、彼の慈雲齋は「分別も思案もいらぬ買旬は人の捨てたる米崩れなり」。又「何時とても買落城の弱峠こはい處を買が極意ぞ」といつてゐる、古い歌たが味ふべき點はある。

十、新規賣買と手仕舞

新規賣買とは始めて賣、又は、買建をなすことで手仕舞とは、賣又は、買建てある玉(米)を切上げて思惑を終了することであるから、之は格別註を加へる要もないが、相場の歩む道は二筋だけで、新規の仕掛け方は矢張り賣か買の二方法さかないのであるから、極めて其方法手段も簡單のものゝやうに考へてゐる人が多いが、この賣又は買の二道から變化する相場の狀態は全く限りがないのであつて、相場を仕掛けるといふことは洵に簡單であるけれど、依つて惹起す損益の關係は際限もない複雜となつて來るのである、且又相場を仕かけるといふことは即ち、命から二番目といふ、大切な金を賭けて自己の運命を決する行爲であるから、其仕掛けの始め即ち、新規に出動するといふ時機が一番大切であるのは勿論のこと

……(二五)……

で、この仕掛け方の巧拙に依つて、其結果に霄壤の差が生じて來る、亦孫子を擔き出すやうであるが彼が兵法の一つに、「兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也」と謂つて居る位で、凡そ戰をなすには其始めの仕掛け方が一番大切であるといふ事を說てゐる。

相場は即ち、人と人との商戰であるから、國家と國家が血を流す戰爭と、大小の差こそあるが、先づ同一の行爲といつても差支ない、そこでこの、最初の仕掛方即ち、新規賣買に就ては最も誤算のないやうにせなければならない。又手仕舞といふのは、仕かけてある米の賣買を終了する行爲であるから、若し賣建である米ならば買埋め、買建てあつたものならば賣戻さなければならない、この手段を轉賣買戻といふのである、この場合であつても餘程注意を拂はなければならないのであつて、例へば、三十五圓五十錢で新規の賣付けがあつた時、考へ通りの順調子で相場が下げ、三十四圓五十錢に低落したものとすると百石に付百圓の利益が生れたわけである、然るに相場は尙低落を停止したのでなく三十三圓臺へ奔落した場合に於て、其下げ始めの三十四圓五十錢に手仕舞ひ、利益を收得して結着を付けた爲、却て大きな利益を取逃すといふやうな事は往々あることで、これ等は即ち、手仕舞の時機を誤つた失敗といふものである、勿論人は神樣でないから、一番高い相場で賣り付け、ドン底の安値に手仕舞をするとか、又は一番安い直段で買建て〻高い天井で賣埋めをするといふやうな事は到底出來得るものでないが凡そ、環境の事情、其他の材料觀測を怠る結果が、飛んだ狂ひを生じて不幸を見なければならないといふ事になる、新規仕掛けの時機が洵に都合よく思ふた通りに行はれてゐたと謂つても、手仕舞の時機を捕ふることが拙劣であつたら、結局失敗を嘗めなければならない、從て手仕舞の時機を鑑定することは、新規出動の場合と同じく大切である。

十一、米相場は怎う動く乎

米穀取引所の賣買取引相場は、財界一部の縮圖と謂つても差支へないやうで、期米相場が何によつて騰貴し、又何に依つて低落するかといふに、これは米に限つたことでないが、物の値段は總じて需要と供給との關係に依つて定るといふ事が經濟學上の原則で、事新らしく說く迄もないことであるが、相場は卽ち、物の値段で、米相場は米の値段である以上は、矢張り需要と供給の關係によつて騰落を營むことは申す迄もないことで卽ち米の需要が供給より多ければ相場が高くなり供給が需要より多ければ相場が安くなるのが當然であるわけで、大勢は勿論こゝに歸着すべき筈である、然し乍ら、米相場には又色々と複雜なる獨自の特性があるのであつて、一概に需要供給の關係而已を以て手輕に片付ける譯にも行かない先づ米相場の見方として其變動基調を大別すると、(一)需要と供給、(二)季節の

關係、(三)順乘年と變乘年、(四)人氣の消長「人爲的と商略」、(五)高下の割合、(六)一般財界の動靜、(七)天災、其他戰爭の突發、政變、政府の米價調節、受渡關係などが主なる原因となり又結果となることが多く、尙細別すると可成複雜の觀測を生ずるのであるが大體に於て上述の範圍を出ない。

米相場の動く原因結果は凡そ以上の諸問題からであるが、この相場を動かす力は仕手にあるのであつて、人氣及び商略の發動は周圍の事情如何にあることは勿論である、就中、最も重要の關係を持つてゐるものは、年柄、月柄、相場の位置境涯であつて殊に年柄は相場の大勢を左右する支配權かあるといつても差支へないものである又相場の位置境涯といふことは大勢に依つて動搖する騰落の目先高下を支配する作用を有してゐる。

年柄といふのは米に關する其年度の情態のことで卽ち順乘と變乘との二つの反對語を以て現はれてゐる。順乘といふのは前年が豐作であつた爲め、當年は殘存米

が多く各地の正米市場には何れも現品が豐富で充滿して居り、尙又當年の氣候が良好である爲、稻の植付けも順調千に推移して、青田譽めの聲を聞くといつた年柄のことで、かゝる年柄は相場の大勢からして結局低落の途を辿る外はないのである、この順乘年に正反對のものが變乘年であつて、例へば、天變地妖卽ち、關東の大震災であるとか、奥羽地方の海嘯であるとか、又は旱魃、洪水、暴風雨、虫害、冷氣等の被害に依つて不作となるといつたやうな事で、人の力を以て防禦することの出來得ない災害による凶歉、其他突發せる戰爭、內亂等も矢張り變乘の部であつて、前年が恁うした一つの禍から作柄が惡るかつた爲、本年へ持越された正米が不足となり、更に又本年も、前年の如く何かの變徵がある爲、更に先行きの需供關係が懸念さるゝと謂つた年柄は、例令政府が、米價調節の武器を揮つて努力をつくし、又一般國民が警戒を拂つて其大勢を阻止しやうとしても到底不可能の結果を齎らすに過ぎないことになる、尤も其變乘の大小にもよつて必

……(三〇)……

ずしもさうと斷言は出來ないが大抵は其大勢を喰止めることが出來ないのが常である。

十二、需要供給と米相場

米相場の騰落する原因は、其事情によつて種々の見方がある、然し直接する主因は何かといふたら矢張需要と供給の關係に基くものといはねばならぬのであつて輓近我國に於ける人口は大約六千萬人に達し、其增加する率は非常の勢を以て進みつゝある、然るに一方供給の實体たる米の年產額は其收獲增加率に於て遲々たるものであつて、其進步の割合は到底人口の增加率と平衡することが出來ないのである、我國の米價が逐年向上の機運にあるといふのは卽ちこの人口か需要するだけの米穀を供給し得ないといふ欠點が最大なる原因となつてゐるのである、或る統計家の推算せる所によると、大正五十年度の我國米穀消費高は一億三千萬石

……(三一)……

に上るといふことで、同生産の豫想額は、現在の比率からして一億石に過ぎまいといふ說であるから、差引三千萬石の供給不足を生ずる勘定となるわけで、隨て我國の如き米を主食とする國民は向後の食糧問題に就て洵に寒心すべき狀態にあると謂はなければならない、かやうの事は、統計上又は各種の推定對策に於て可成興味ある議論であるが、本書の目的に就て餘り必要もないのであるから、こゝには單に其變遷行程を述べ、將來需要供給上の均衡に非常なる影響があるといふ概念だけを明かにし、最近需供の實跡を上げて參考に供する事に止めて置く。

大正元年以降米穀需供表

（單位石）

	前年產額	需要高	不足高
大正元年	五一、七一三、四三三	五四、三二三、五二一	二、六二一、〇八八
同　二年	五〇、二三二、五〇九	五四、五〇三、六一一	四、二八一、一〇二
同　三年	五〇、二五五、二六七	五四、一七九、九八七	三、九二四、七二〇
同　四年	五七、〇〇六、五四一	五九、三〇九、九三六	二、三〇二、九九五
同　五年	五五、九二四、五九六	五七、四六二、八九一	一、五三八、二九五
同　六年	五八、四四二、三八六	五九、八七三、七五八	一、四三一、三七二
同　七年	五四、五六八、〇六七	六〇、九二九、一〇一	六、三六一、〇三四
同　八年	五四、六九九、〇八七	六三、八七七、三一八	九、一七八、二三一
同　九年	六〇、八一八、一六三	六三、六六一、七六八	二、八四三、六〇六
同　十年	六三、二一九、一六二	六七、六九二、八五九	四、四七三、六九七
同　十一年	五五、一八〇、五三九	六二、〇〇〇、九四八	五、八八〇、四〇九
同　十二年	六〇、六九一、九二九	六六、二〇七、六四〇	五、五一五、七一一
同　十三年	五五、四四四、〇八九	六五、七八四、二六二	一〇、三四〇、一七三
同　十四年	五七、一七〇、四一三	六七、〇〇八、六四四	九、八三八、二三一
同　十五年	五九、七一〇、二三一		

即ち以上の如き趨勢を辿つてゐるのであつて需要供給の平衡を失つてゐる上からは米相場の逐年騰貴傾向にあるは當然の歸結で、假令其不足額は、臺灣、朝鮮米乃至外米を以て補塡し得らるゝとしても、内地米の騰勢力を抑壓するといふことは到底不可能の事とあきらめる外はあるまい。

……(三四)……

十三、順乘、變乘と相場觀

順乘年と變乘年の概念は前にも一寸述べて置たが豊作尻に於ける古米多き年柄にして、新穀も亦、豊饒を見越さる豫想であれば、群象心理の樂觀が起るのは當然のことであつて、兎角前途の油斷が起り易いのも亦當然である、而も新穀の豊作を豫想することによつて、收獲後の供給過多を氣搆ふることは必然の成行であるから、前途安といふ觀念から、我も吾もと賣逸るのが常で、不知不識の間に賣過ぎ、動もすれば、常軌を脱線する惰性を生ずることは珍らしくない。之に反して凶作尻を受け、古米不足に加へて、天變地妖の強材料が圍繞するといふ年柄にあつては、我も人も、先高の見解を生じて買逸る傾向となるは免かれ難い理であるから、米相場は昂騰に昂騰を續け、一時は天井知らずの狂奔を見るといふことになるは必然である、併し斯樣の年柄は米高に對する警戒の念が生じて來る爲、各種の節約方法が乘究され、代用食の奬勵とか、政府の調節などが行はれ、自然的米穀の喰延しを見るに至るのである。即ち前者が順氣の年柄で、後者を變乘の年柄と稱するのである、そこで順乘の年柄は前述の如き關係によつて出來秋までの米相場が安いのが常態であるが、後ち一朝にして變兆が現はれ、收獲の悲觀を意味するが如き問題が起つたとすれば、其反動作用が起つて意外なる暴騰相場を示すといふ實際は可成多い。彼の慈雲齋も「古米多く豊年と見る安米は空腹上りの年と知るべし」と謂つてゐる。

變乘年といふは之と全く正反對であつて、前述の如く買思惑が旺盛である爲、彼

……(三五)……

我共に買煽る關係から、相場は油に火を賤げるが如く、強度の熱氣を發揚して、奈邊まで奔騰するか知れないといふ物凄い景氣となる、然し斯樣の年柄は警戒觀念が嚴重である爲、俺は麥食をやつてゐるとか、又は芋を混食してゐると公言するものこそないが、事實は、外國米の混用食などが行はれ、或は其他の方法によつて消費の節約が計らるゝことは必然である、彼の本間宗久翁の遺訓に「豐年の凶作、凶年の豐作」と謂つてあり、尙「足らぬものは餘るし、餘るものは足らぬといふ事あり、但多きものは諸人澤山と心得、油斷して覺悟せず、夫故極意は不足するなり、不足するものは、人々油斷なく覺悟して調べ置くが故に極意は餘るなり」と說いてゐる、蓋し相場するもの〳〵味はふべき事である。

十四、人氣の消長と相場觀

需要供給に次で最も肝要の相場觀は、人氣の消長即ち人力と商略とである、之は勿論米相場に限つたことでなく、株式相場でも、又は綿糸、生糸の相場でも同じことで、凡そ相場の變動を起すことは、時の需供狀態と、時の人氣作用とに因て起るのであるから、この二つのものは車の兩輪の如く又影の形に映ずる如く、或は物の響きに應ずるといつた工合の因果關係から絶つ可らざる連絡か保たれてある、そこでこの人氣消長といふのは怎ういふものであるかといふに、例へば、好景氣時代の全盛期に於ける東株が八百圓の價値あるものとして買人が多かつたものが不況悲觀時代になると八十圓でも尙買手がなかつた事とか、又は四千圓以上の好景氣を見せた生糸相場が、不況時代になると千七百圓も高い相場だといつて賣らるゝといふのが夫れで、其時と場合の人氣作用から生ずる、相場の結果といふことに外ならないのである、理論的に述べると際限もないが、先づかうした狀態が參差交錯して、因となり、又果となる譯で、或は實体となつて現はれ、又は現象となつて相場騰落が起つて來る、而も何時まで循環しても盡きることがな

いのであつて、或時は狂瀾怒濤となつて現はれ、或時は平靜休養の形態となつて現はるゝのである、即ち波瀾狂濤相塲も人氣の消長で、保合相塲も人氣の消長に過ぎないといふことになる、有名なる金泉錄の著者牛田慈雲齋がこの相塲消長を歌つたものに可成首肯すべきものがあるから二三拔萃して御目にかける。

○

上る理も時至らねば上るまじ
理を非に枉げて米にしたかへ

○

萬人が心に迷ふ米ならば
連れなき方へ赴くがよし

○

豊年は萬人弱く我弱し

安きによりて賣は禁制

○

凶年は千人强く我强し
高きによつて買は禁制

○

弱き理世に現はれ出れば皆弱氣
安きによりて旗は禁制

○

强變が現はれ出れば皆强氣
高きによりて買は禁制

○

弱き理が現はれ出れは皆弱氣

何時にても買の種蒔け

○

飛び下けは何時でも米に向ふべし

飛び上げならば米に隨へ

○

飛上げの三日續いた高なぐれ

米に向ふて飛下げを待て

○

萬人が萬人ながら强氣なら

阿呆になりて米を賣るべし

○

野も山も皆一面に弱氣なら

阿呆になりて米を買ふべし

○

米安く人氣の弱き日は買ふて

人氣の强き高い日は賣る

○

たゝ米は人氣の弱き日に買ふて

人氣の强き日には賣るべし

○

千人が千人弱き日は買ふて

萬人强き日には賣るべし

○

上るべき氣の盡きぬれば自ら

下るところが天性と知れ

○

下るほど下れば弱い氣もつきて
上るところが天性と知れ

○

萬人が呆れ果てたる値が出れば
それが高下の境なりけり

○

以上は何れも米相場の人氣消長を歌つたもので、今日の時世とは稍縁遠い感じのするものもあるが概して人氣相場の見方を喝破してゐる、恐らく現今の米相場であつても、この範圍を脱することはあるまい。

又猛虎軒著の八木龍の卷の一片に人氣消長譬喩問答といふのがある、これも多少

の參考になるやうであるから茲に拔萃して見る。

○

(問) 吾聞く、相場を爲す者は十人が九人迄、損して退き、只一人のみ益して退き、其一人も亦後の九人の内なりと其理如何

(答) 大抵似たり

(問) 何故に損する人多きや

(答) その心中例へば兩の元手にて百兩までにせんと思ひ、止まる處を知らずして、尙々氣高ぶり、米を增しかけてゐるが故に遂に一文無しになつて止むものなり、商内の仕樣を知らず、うか〳〵こゝに踏み、其處にも踏み、何んで損したことやらわからず、無茶苦茶に損をして、其上强いこと負け惜みをいふて後悔するは、右九人の部なり、それ何が故に狼狽るにや、心術を外にして他事に迷ひ、積り方を知らずして、法をたつるこ

と〻なすは早く取たくらんとして急ぐが故なり、それ積り方をつづまやかにして、其法立を悉し、心を鎮めて慮をよくし、損を覺悟して商内を行ふ時は、中らずとも遠からじ、夫れ如斯者は右の十人のうちの其一人也、於戯心を用ゆるもの〻少なき事や、人皆損をすれども、其損する所以を知らず、所謂喰ふて其味を知らざる也。

擬問答はこれ丈けに了つてゐる、辭句が古くて、殆んど陳腐のやうであるが、相場界の通勢を剔抉して餘りある點は古今とも變りがない。

……(四四)……

十五、季節と相場關係

季節卽ち、四季の春夏秋冬、又は各月柄の推移といふことは、農事上極めて重要なる關係があるのであつて、特に米穀の作柄に就て非常なる關係を有する、そこで需要供給の過不足或は季節の順逆乃至農村の納稅期とか、又は天災、地異、其他農村行事の良否など、年柄の需給大勢を基調とする四季及び年柄卽ち、月々毎の相場には各特有の動搖が起ることは免かれないわけであつて、月柄といつても年柄の大勢がある以上は勿論之に順應して行かなければならぬ因果率がある筈であるけれども月柄に依つて起る現象は、必ずしも年柄の大勢と一致するものでもない、之を一寸述べて見ると普通に於て一月は舊曆の歲末に當るのであつて、地方一般の農家は、今日尙舊曆の決算關係を習慣としてゐる者が多いことから此月は米を賣つて金に換へるといふ傾きがある、其他に又納稅期である關係等からして、何れかと云へば市場へ米を出す月で、從て相場は低落するが常である、然し新曆の年末から高步調の相場であれは、其惰性として相場の高いこともある次の二月は舊の正月であるから米は大抵出さない傾きとなるのであつて、相場が一月中に下げ過ぎて居た場合には多少の引變しはあるのが例であるが大抵相場の動搖は大きくないのが普通である。三月、四月は格別の特性がない月柄であるが

……(四五)……

天災地變とか或は政界の動搖、又は議會の解散とか、其他突發事變の起らない限りは、正米を標準とする外ない月柄で所謂三五の十五といふ平凡の相場であるのが普通で、保合、往來の事が多い。五月は農家の播種期であるから軈て天候の問題が持上つて、何か天候の故障でもありさうな噂でも立てば、相場は概して上氣味になつて高步調を辿ることになる、然し當月は梅雨期に近くなる關係からして粗惡米の處分をせなければならないといふ事もあるから、年柄大勢の如何に依つては、可成相場の動搖が起り易い。六月は又大切の月で苗の發育から青田時代に推移する爲、相場は漸く變動含の狀況となつて動搖が起り易い、從てこの頃の天候如何によつて空梅雨問題などが惹起して相當の波瀾相場が描かるる事が往々ある、それから七八月となつては全く天候相場となるわけで土用の推移如何などによつて相場が激しく變動する、而もこの時代は大抵上げ目の相場が多いが、青田譽めの人氣などからして暴落を演ずるやうな事もある。九月は二百十日、二百二十日或は白露其他の厄日が多く所謂大海上の期節であるから、年を通して最も米相場の波瀾が多い月である。次の十、十一月は收穫期であるから、作柄の如何といふことが問題に上り、こゝにも相當の波瀾が起る。そして最後の十二月になつて凡そ農村行事が極りが付き、總勘定を見るといふことになるのであるから、相場は何れかと謂つたら下向かんとする傾向をもつてゐる。

以下は米相場の六韜三略と云はるゝ明和七年出版の商家秘錄拔萃である、こゝには米相場月柄の見方を可成詳かに述べられてある。

米相場月別觀　（舊暦）

◇正月◇。陽氣に向ふより自然と高き月なり、値段引下げ候はゞ買方宜敷候、高く出で候はゞ、二月へかけ天井打つものなり、この二月へかけてといふことに心得あるべし、甚だ景氣よゝ出で候はゞ、正月初相場より八日、九日に至つて天井

打つことあり、二月とあるは依て油斷すべからず、正月四日より寄り二月迄と心得べし、然れども早く天井値段を出して、一旦下り候とも、押目は買廻しあしらひ候も然る可く候、二、三月末に至らずして實は大下げあるまじく候。

◇二月◇。何彼と色々高き個條を申立て、高き月也、然れども、大方天井打ち申す月也、買方見合せ、賣方に氣を付け可申候。

◇三月◇。正二月の間に高値を出し、段々下げ候はゞ、此月買方宜敷候、然れども、正二月の天井より有米少き年にても五分か七分、また多き年は一割も下りある年なり、下り無く候はゞ通ひ相場の如く見せかけて、中々下りあるまじく相見え、其後九州米入り候て、四月中前後に底値を出すこと有之候、兎角正、二月天井より下り少なく候はゞ、休居りて篤と樣子を見合せ、買付可申候、値段思ふやうに下り候はゞ、何彼と搆はず、買一圖の月となるべし、併し之も大体の論にて前にも論ずる如く、有米多くして、人氣に不足すれば高く、元より高下の定まれ

る事は無しと雖も、先づ大体捌きの所と云ふ也。

◇四月◇。この月は三月より少し高き値段位つき可申候、必ず五月は高きものに候、氣分弱く候はば休み可申候、其うち賣方見合せ、節句前後の買方宜敷候、正米手持ならば、持越に可致候。

◇五月◇。此月は米を植る月にて、未だ何の豐凶もわからず、去年の米は次第に出捌け、有米尠くなるに依つて、例年高き月なり、利分あり候米は、賣かけ置可然候。

◇六月◇。この月天氣次第にて豐凶の定まる月なれば豫め斷じ難し、例へば土用天氣を危みて、土用前天氣の宜しと雖も格別下りなきときは、土用に入りて、いよ〳〵天氣宜しき時大下げあるべし、又始めより天氣續き良く、土用前に段々下げ候へば、土用に入りてゝ同事か、結局天神祭禮(大阪天滿宮祭典のことで舊六月二十四、五日の兩日)前後より上ることあり、是等の事を考ひ可申候、まだ

豐凶の確と定まらぬ所なれば、相場の大片付はあるまじく候、人々大切にする節なれば、商内は輕く可致候。

……(五〇)……

◇七月◇。海上時分に候へば、諸事控可申候、米の數多く仕かけ申す間敷候、商内は輕く致し、六月より此月へ掛けては日和よき日に下げ候はゞ買ひ、日和すぐれず、東風など吹き候て、上げ申す日は賣り候へ、相場に逆ひ候方宜しく候、一日、二日の晴曇を以て豐凶の定る事には無之候へども、人々の心を以て高下する事なり、其上天氣は、夜の間に變ること多ければ、先づ十年押ならして逆ひ候て宜敷候、併し當月末に至りては、次第に豐凶もわかり候に付、秋下り油斷なり難く候、豐凶に付、升目積り肝要なるべく候。

◇八月◇。海上時分、豐凶の荒方定まる月なれば、諸事控へ可申候、但米積り致し賣方可致候、夫とも夏以來段々下り候はゞ買方宜敷候、兎角豐凶次第なれば油斷ならず、秋下りの時分に候へば、隨分氣を付け可申候、豐年は秋の彼岸に立つものにて、底値を出すもの也、八月中前後、古來底値其年の新米底値になる也、前年よりの樣式この底値にて其年の世の中の歩積り相知れ申候、右の底値出で相場高値になり候とも、また九、十の兩月前後、新米の底値出づべき也。

◇九月◇。此月不作にて高値になり候はゞ八月より段々天井値出るに付、新米近寄申すほどに、下げ申すもの也、凶年にて上り候年、此月買方無用、豐年にて下値に候へば、新米近寄申ほど上げ申すものなり、賣方無用たるべし、買方可然候但豐年とて段々引下げ候處にて、作取人に相成候て、取實尠なく又は、遠方不作江戸高値などの噂申出候て、其外何にても上るべき手懸り出來候はゞ、上げの付によるものなり、若し急に一二圓上り候はゞ、樣子見合せ、少し押したる處、買分になり可申候、この上りかゝりたる所は油斷なる間じく候也。

◇十月◇。この月新米入込候はゞ下値ある月なり、若し不作年にても、値段高値に候はゞ、新米入込むほど緩み申すもの也、若し豐年と申し、段々古米より引下

……(五一)……

げ候て、新米へ移り候はゞ、新米人込むほど、上り申すもの也、買方可然候、中國、廣島等の札、二三番目より升目積り致し、豐凶考へ買付可致候、十月八日出廻り相場より、十月十七日の帳合商内始まり候時分が買所にして、冬の米は十に九つは買に宜しく候、氣分弱く候はゞ休み可申候、氣分強く候はゞ思惑より二匁手前より買付可申候、新米最中に候はゞ底値に保合申す月也、兎角買方より外は無之候。

◇十一月◇。此月は十月より米に位つき、高き月也、往古より十一月中旬、米の札數も揃へ、大札にて此頃諸人安かるべく思ふ故、結局安からず、假令十二月に下り申す米も、中々當用に下げ申さず、ぽつ〳〵買方宜しく候。

◇十二月◇。安からざる月なり、然れども、米買の手に、米入り申し候はゞ、藏方賣れの樣子にて、不圖はぐれ、ばた〳〵と三四匁も、二三日のうちに下げ申すこと有之月なり、當月は手詰の場にて、ベン〳〵と下げ申さず、二三日中に下げ

申す程は下げ申すもの也、其所一日も手前よりは油斷なく受付け可申候。

秘錄の拔萃はこれで終りである。これは今より百五十年前に刊行せられたものであるから、勿論今日の時勢に當篏らぬのが當然であつて今日の相場觀から餘程遠き感はあるが、凡そ其解く處が詳細に亘つて、大体の相場眞諦、妙趣を囚いてゐる點に參考とする價値がある。

十六、相場高低の割合

米相場高低の範圍を定義するものに、古來其騰落の局限點を、三割超えぬものとされてある、勿論除外例はあるが、大体に於て三割局限といふことは肯定せなければならない、こは相場歷史を繰つて見れば明瞭することであつて、米相場なるものが始まつてから、三割以上に脫線したといふことは僅かに指を屈する位ほかない、それも大抵、大きな天變地妖、關東大震災の如き破壞的相場とか或は石

井借金王の買占めの如き大かゝりの人爲的無理相場などに脱線した事があつたに過ぎぬのであるから、これ等は普通の定義とするわけに行かない除外例とせなければならないのであつて、先づ三割範圍を一劃相場と見て差支ない、この高低割合といふのは、賣旬、又は買旬の目安を知る爲に知つて置く必要のあるもので、相場する者の常に心得て置かなければならない、之を記錄するには、分足、割足などといふ罫線を利用した方が簡單でよい（罫線解說の處參照）

十七、米相場と鞘の關係

米相場には、當限、中限、先限の三種があつて、當限には當限の特色から波瀾が起り、中限は又中限の事情が存在して居るは勿論のことで、又先限は先限の特殊的因果率を潛有してる筈である、而してこの三限月の脈落する誘因も亦特有の異彩を放つのである、例へば金利、藏敷からする季節的の需供按排とか、又は其時其地方の人氣消長などよりして、當限に米の不足はないけれど、中限には不足の懸念があるとか、或は先限の時代として、當、中限に關係せる特殊の事情が生ずるとかいふことで、一般原因と誘因とは千態萬別である、それ等事情の錯綜からして、こゝに各限月の鞘開きといふものが起つて來るのである、而して人氣の消長、需要供給の均衡如何といふことから、或は上鞘となつたり、又は下鞘となる更に鞘の廣狹、伸縮の關係によつて、各限相互の因果作用が起つて來ることになる。

普通の年柄に於てこの鞘替を示すのは、古米の代用として、新米の受渡しが出來る時期卽ち、十月下旬の受渡となるべき十月限以後からが當然とされてある、然し必ずしも、其時期のみとは限つて居らぬ、何れの季節、何れの限月であつても當然上鞘となる可き筈の米が下鞘に廻つたり、之と反對に普通下鞘にある可き米が上鞘に轉ずるといふことがある、こは勿論變化せなければならない特別の事情

があるからで、所謂例外が原則を除外するといふ理論である。

……(五六)……

鞘關係がかうした變態になることは、往々あることで、即ち一種の人氣消長作用であるが一は相場の位置が高過ぎるか、或は安過ぎるかといふことゝ他は仕手の商略的前途觀から餘儀なく斯の如き現象が起つて來るのであつて、不自然的の大勢とも見做す外はないのである、例の慈雲齋は其金泉錄にこの鞘替り相場の觀察を歌つてゐる、之も一種見方であらう即ち

○

四季共に鞘替りには氣をつけよ
高安ともに米にしてかへ

○

下鞘が上鞘になる鞘變り
空腹上り德乘せて買へ

○

上が下鞘になる鞘變り
五月末から賣種を蒔け

○

下る理と皆人毎に極めたる
大鞘ものに旗の種蒔け

○

高下とも一割五分の大鞘は
いつでも米に逆ふ理と知れ

○

鞘關係の相場見方は以上の金泉歌によつても概念を定めることが出來るやうで、現今の相場道からしても別段變りがない、寧ろ廻り遠い議論のより簡單で且明瞭

……(五七)……

する。

十八、相場の大勢觀と目先觀

……(五八)……

敢て米相場に限つたことでなく、大勢を察知するといふことは極めて大切の事であつて、米相場の大勢を知り得ない者は米相場を行る資格がないといつても過言でない、然らば大勢とは何んであるかといふに、これは經濟上あらゆる諸現象の趨向をいふのであつて、米相場も亦一つの經濟的現象として、常に其うちに包容せられ、其現象の動搖するに從つて騰落を演ずべき性質を有するのであるから、米相場の騰落如何を判斷せんとするには、この大勢によつて大體の觀測を推定することが必要である、この大勢なるものは不況より好況へ、不景氣から好景氣へ循環する行程のことであるから大相場の天井及び底値を見極める唯一の指針であることは云ふまでもなく、人氣の誤解とか、商畧的の駈引によつて、一時背馳する如き現象が起ることもあるが結局夫れ等の原因が停止する時に於て、再び其行進を起して目的地點に到達するに至るのである。目先觀は是と異なり、大勢道程に於ける一時的現象であつて、普通一般に高低を起す原因は、人氣の好惡、限月の關係、內外產米の情況、受渡關係、肩替又は乘替關係、煎れ米と投げ米、正米事情、米價調節、作柄の豫想其他眼に現はるゝ諸材料の爲に騰落を演ずる狀態を云ふのであつて目先の駈引上必要缺く可からざる一つの條件である。苟も米相場に儲けやうと思ふ者は常にこの大勢の如何と目先相場の判斷を誤らないやう研究してゐなければならない。

十九、場面觀と足取り

相場觀測の方法は可也多くあるか、中にも場面及び、足取り卽ち、罫線から、相場を觀測するといふことは、最も必要のことでもあり、且又研究することに頗る

……(五九)……

價値を有する、場面とは期米市場全體の現象のことで、人氣の消長による多數の人々が認むる價格か、この一場に集中して需要と供給又は假需供即ち賣と買とが取組まれ、或は解ぐれたりする一つの舞臺動靜を云ふのである、又足取りといふのは日々、若くは月々、年々等の相場が進退した歩みの事であつて、之圖に現はしたものが仍ち罫線表である、この場面及び足取のことは、米に限らず、凡ての相場に關係を持つてゐる人々の利用する處で、又心得て置かなければならないのであるが、足取表(罫線圖)なるものは、夫れ夫れ、過去の相場徑路を知るに最も便利で、且つ將來を推測するに大なる參考となるものであるから、所謂相場歴史の繪畫とも云はれてゐるのである、從てこの場面と足取の二つは相場を行るに密接の關係があるわけで、材料の觀方に照合比較して其相場が如何に動くかと見ることに就て益することが多い。

乍併大体の人々は、其目的物について、眞相の調査を面倒がるといふ傾向があつて、既往、現在、將來といふ觀測の眼目をさし措き、唯皮相の場面觀、又は過去の罫線にのみ便つて相場を判斷する惡い癖がある、かうしたやり方は全然失敗を招くに過ぎない。場面や罫線は人氣の趨く所を示針し又過去の徑路を明かに印してゐるのであるから、其印せられた諸現象によつて將來の形態を知悉することは決して困難でない、如斯根本の觀察を沒却して、唯其日其日の經過而己に囚はれ、相場高抵の成行き皮相を考へてゐるやうであつたら、所詮、先行の見當はつかない筈で到底前途の高低判斷などが出來得やうわけはないから、相場に成功することは不可能である、若し稀に勝利を得ることがあつたとしても、それは萬一のことで所謂紛れ當りといふものである、從て目先人氣の傾向を知るに重要なる場面も、又は便利な罫線も用ゐ方によつては却て有害無益のものとなることもある、生兵法は大疵の基といふのは卽ちかやうな事を稱するのである。

二十、足取の種類と觀方

……(六二)……

相塲の足取りといふのは、相塲が上げるか下げるかの二た通りだけであるけれど仍つて起る分岐の路筋は甚だ復雜に亘るのであつて、往々迷宮に入るやうなことがあるから常に其練習に努めなければならないわけである、古來便宜上に大別されてゐる相塲上の種類は、一保合相塲、二往來相塲、三チリ相塲、四關節相塲、五通ひ相塲、六伸び相塲、七樣變り相塲の七種で、又畫法及其形態から區別すると凡そ左の如き區別がある。

(1) 罫線の畫方

イ、星點法(七曜畫法ともいふ)

ロ、鋸齒法(山形法ともいふ)

ハ、釣形法

ニ、垂直線法

ホ、連點法(連定法ともいふ)

ヘ、錨形法(棒形畫法ともいふ)

ト、陰陽切替法(酒田足ともいふ)

(2) 罫線の形態

イ、上げ足(昇騰の行程にあるもの)

ロ、下げ足(低落の行程にあるもの)

ハ、毛拔足(低落を意味するもの)

ニ、逆毛拔足(昇騰を意味するもの)

ホ、單關門(昇騰を意味するもの)

……(六三)……

へ、復關門（暴騰を氣構へるもの）
ト、三像佛（低落するもの）
チ、逆三尊（昇騰を意味するもの）
リ、包足（變動相場の中間に起る足形）

右の外描法の方にあつては公定足、一定足、高低足、歩足、立合足、日足、月足年足、寄引足、十錢、二十錢、三十錢、五十錢、一圓足其他の種類。又形態の方にあつては、飛足、樣替足、陽象、陰象、滿玉、天井、底値、其他の形態があるが、何れも前記の描法又は形態より變化したものであつて特に區別をつける必要は認めない、又是等の描法、形態を一々詳說することはこの小冊子のよくする所でないから、乍遺憾これ位で止めておく。

廿一、保合相場の解說

保合相場とは「居据」、「同事」、などの意味もなるが、普通に保合といふのは、一定の範圍を限つて、上げたり、下げたり、又は停滯して數節、乃至、數日間をもち合つてゐる相場のことで、持合相場ともいふ、而して保合相場のうちにも大保合、小保合、或は天井保合、底値保合などゝいふのもある、併し何れにしても其型は似通つたものである、この保合相場といふのは、本來相場其ものの常態であつて、波濤狂濤の如き大なる曲折を描く相場が其變態である、之は人世觀に於て其平穩無事といふことが常態で、災禍、危難といふやうなことが變態であると同一の理である。

この保合相場はどうやう時に起るかといふに、普通、相場の高低變動を惹起すべき原因もなく、至つて靜穩無事の場合か、或は相當の材料が現はれて居つても仕手の强弱兩者が互に乘ずる機會がなくて乘出さない爲、上へも行けず、又下へも行き難いといふ所謂上げ惱み、下げ澁るといふ型であつて洵に退屈する相場であ

るが、一面には又變動、波瀾を待つといふ意味に於て、最も堅張期にある相場であるといふことも出來得る。

……(六六)……

普通一日間の値巾が五六丁乃至十丁以内に局限されてゐる極めて小なる保合相場は之を停滯的保合といつてゐるが、一日間の値巾が十丁以上、二十丁前後を往來する型のものは、之を往來的の保合(卽ち普通の保合)といつてゐる。この往來的保合は、强弱の勢力が伯仲の間にあつて互に角逐する際に現出するものであつて差向き上下何れにも相場の逸出する餘地があるが、大体の性質上、特殊の事情が起らなければ、今迄つて來たと反對の方向に步調を轉じやうとする傾きをもつてゐる。又停滯的保合は、往來保合から日頃が進んで、上へ行き悶へ、或は下へ悶へて、だん〳〵相場の巾が迫つた場合に起つて來る現象であるから、必ず最近に於て一反動の起つて來るといふことを、豫期して差支へないのであるが、永續性ものでは勿論ない、この保合も時と場合によつて、相場が若いのであるか、又は老境に達してゐるのであるかといふことに注意する必要がある、卽ち相場の年齡?に大きな關係をもつてゐる。

然らば保合相場に對する手段はドウすればよいかといふに、先づ高い處(保合頭といふ)、安い處(保合底といふ)、とを見別けることが肝要である、この見別け方さい出來得れば、仕かけ方は案外容易なものである、要するに中値相場に乘らぬやうに注意すればよいのである。

保合相場はドンな時に分岐するかといふに、(一)先限の賣買取組が非常に增加した時、(二)新規に有力なる變動材料が現はれた時、(三)强弱の兩者卽ち賣方も買方も相場に飽き、仕掛けた玉を減らした時、(四)上げ、下げの相場が迫つた時卽ち、停滯保合の極端になつた場合、(五)賣買出來高か非常に減少して極端の閑散狀態となつた時などで、凡そ保合の壽命は二三週間位(例外は別である)であつて其分岐は大抵前場に多い、そして普通は上げ相場の保合が下げ、下げ相場の保合

……(六七)……

は上げとなるのが常で、中の保合は押された方が不利益となるのが例である、それから大手筋などの人爲的に支へた相場であると、保合の長びくに連れて十中の八九は、マバラ（鳥合勢）の不利益となるが普通である。

……（六八）……

保合相場の放れるのは普通の場合に於て、多少、相場の飛放れを伴ふものであるが、何時でも大きな放れがあるものとは限らない、又一寸目立つた飛び放れ相場があつても、直ちに保合放れと斷定することは出來ない、要するに相場の境涯（位置）と行惱んだ方向即ち、昇騰を受けた保合か又は低落を受けた保合によつて最終の方向は其何れにあつても、當面の方向如何といふことを、判斷せなければならぬ、保合放れの場面は、普通從來の反對方向に轉ぜんとする傾向をもつてゐるものであるといふことを承知して置く必要がある、然し逆行しても、伸び相場とならなければ、再び從來辿つた方向に進路を向けることもある、保合中に於て放るゝこと三十丁近くの相場が出た時は、大抵保合分岐と觀てもよいが、これとて、さう計りとは限らない、十丁内外の飛び放れから分岐する場合もある。保合相場に就て注意を拂ふべきことは、其放れに於て必ずしも大相場が伴ふものと、速斷してはならない、長保合の相場には可也大相場が出ることがあるけれど、又或る場合には、保合から、ヂリ相場に移つて進行を續け、其後に於て、却て反對の方向に、大相場を演ずるといふやうな事も往々あるのである。かやうな事は過去の實例に徵しても明瞭であるから、相場に熟練した人なら、自ら判斷がつくものである。

廿二、往來相場の解說

往來相場といふのは、矢張保合相場の一種で、保合相場の保合範圍が稍大きいといふだけのもので強て保合相場と區別するほどのものではないが、普通に相場の値巾が二三十丁或は、夫れ以上の同一軌道を往つたり來たり往復するといふ相場

……（六九）……

で、それが又局限性である爲、上へも下へも放れ得ない、そして其期間も隨分永く續くことがある、本來の原因は總じて保合相場と同一の事柄によつて其現象が起る、これに對する一切の手段方法も保合相場と同樣に見て差支へない。

廿三、ヂリ相場の解說

ヂリ相場とは讀んで字の如き相場のことで、ヂリヂリと或る一點に向つて進行するのであるが、これも矢張り上ヂリと、下げヂリの二種がある、卽ちヂリ〳〵と上へ進行する相場がヂリ上げで、同じ型で、下へ落ちて行く相場がヂリ下げといふのである、この相場の本態は殆んど目に立たぬやうに上へか下へか歩を運んで行く相場であつて、押し又は戻りといふことが殆んどないのである、そして賣方か買方かの或る一方者にのみ利益がある場合に於て敗者の方で何とかして頽勢を盛返さうと焦つても、其機會がなく、勝者も亦焦らずして、自然に仕し副を壓迫するといふ場合に多く起る相場型であつて全く素切らない相場である、かやうな不得要領の點は保合相場ともよく似てゐるけれど、保合相場と相違してゐる點は保合相場の局限性なるに對して、この相場は不得要領の間にあつて、或一方の地點へ進行するといふ事である、而してこの相場には上澁り又は下澁つてゐる間に多少其反抗的氣味を有してゐるうちは、其初期であるけれども、澁り氣味が少なくなれば、其末期に近づくといふことになる、ヂリ相場の主なる點は、(一)ヂリ高から、ヂリ安にヂリ安からヂリ高に變化する外ないといふ急騰落材料に乏しき場合、(二)保合相場の後を受けて、ヂリ〳〵上又は下へ蠢動する相場の樣替りにならぬ場合、(三)ある相場の頂點又はドン底に達して、潛勢力を生じたけれど、直ちに其反動が現はれないで、前の惰性が暫時繼續するといふ場合などである、然し斯る場合のヂリ相場は其ヂリ足の終末に於て大變動が起ることがある。

廿四、關節相場の解說

關節相場とはヂリ相場の少しく荒いもの〻ことで往來相場と保合相場の關係の如きものである、この相場は、多少の引返しを伴ひつ〻大勢に隨つて上へか、下へかの一方へ行進を續けて行くのであつて、例へば二十丁下げて、十丁返すとか、又は三十丁上げて二十丁押すといふ風に、繰返し、繰返し、其進行を繼續する相場である、然しこの相場のヂリ相場と聊か異なつて居る點は勝者が利喰して更に買ふなり、賣るなりの陣立てをすること〻、敗者が時々逆襲を試みて、再び擊退されるといふことから起つて來る現象だけで、其他は殆んどヂリ相場と異なる點はない、つまり、ヂリ相場と關節相場とは、其程度の差があるといに過ぎないのであるから強てヂリ相場と區別する必要もない。

廿五、通ひ相場の解說

通ひ相場といふのは、大勢下げ相場の道程に於て時々大戻しを繰返し、更に低落を辿るか又は、大勢上げ相場の折柄に、大きな押目をつけて、再び昂騰をつゞける相場の事で、これも關節相場の荒つぽいものに過ぎないのであるから、大勢の强弱に於て、一方者に利益のある爲、低落或は昂騰する道程にあるけれど、勝者の追擊が一巡した時又は敗者の逆襲があつたとした場合、或は勝者の或る一部が中間利喰を試みた時などに起る相場で、この相場は一種の特性をもつてゐる、それは相場の老境即ち上げ止りか、下げ止りにある絕對極にはこの現象が起ることは極めて稀れであつて、相場大勢の分岐した直後、卽ち上げか、下げかの初期及び其中間期に於てのみ續出的に起つて來るといふことが多いと云ふことである、之は其原因が、大勢下げ相場であれば、高値覺えの下げ過ぎ反動で、又上げ大勢

相場の場合では安値覺えの上げ過ぎ觀念からである爲、即ち、其反抗的人氣を壓倒して、一日又は二三日のうちに五六十丁或は夫れ以上も昂騰を演じた場合、或は前同樣の奔落を演じた相場に於てこの通ひ相場が出るものである、それであるから、この通ひ相場といふものは、其相場型の鑑定さい誤りなく出來得れば、利益を收めることが案外に容易で、一ヶ月五六十丁か七八十丁位の動きしかない相場であつても、其通ひ鹽梅によつて二度も三度も利喰を繰返すことが出來得るのであつて相場の巾の倍以上も利益をとれることもある、こは勿論逆仕かけをした相場のことであるけれど、大きな通ひ相場を見付けさいすれば損失を招くやうなことは滅多にない、而して其見方も大して面倒でなく、其道に苦んだ位の人なら至つてわけはない。

……(七四)……

廿六、伸び相場の解說

伸び相場とは强氣と弱氣の兩勢力が其主要戰に於て、ドチらかの一方者が敗け軍さとなつて全軍が餘儀なく潰走するといふ場合に、戰勝者が之を追擊する爲、敗けた相手方を追掛けて突進する際に起るのであつて、即ち、徹底的最後の決戰を意味するものであるから、相場の足取りからしては、大低玆に天井か或は大底又は、小天井、小底といふ、天井、底値を形成することが多い、この相場の名稱を伸び相場といふのは些と其當を得ないやうでもあるが古來斯く言へ習はしてあるから、ここにも慣習上の題目で解いて見た。

廿七、樣替り相場の解說

この樣替りといふことは相場の景況が一變する場合のことをいふのであつて、あらゆる相場の型に於て、この樣替りに乘ずることが一番安全で、且利益を得る點に於て第一位にある、この相場には必ず飛び放れとか又は猛進とかいふ狀態が伴

……(七五)……

ふものであつて至つて見易い相場であるから、大きな飛び放れを演ずる場面には何を措ても飛付きの仕かけを斷行せなければならないが、この相場には、其値巾が如何に少なくとも三十丁以上はあるべき筈のものであるから、それ以内の動搖ならば、まだ樣變りと判斷するに早い。

この樣變りの起る原因は勿論一樣でなく、概して下記の如き場合に豫斷される

(い)。長期間の低落又は昂騰相場を續けたる後。ある日に於て又も一大飛躍又は暴落を見せ、其まゝ前進又は背進して、今後も續て、下げか上げかの一道さないと一般が期待してゐた時に其期待を裏切つて、下げも上げもせず、案外に頭が重くなるとか、又は、底固き含みがあつて、目立つた反動を示すやうな場合。

(ろ)。前項同樣の關係に依る相場の持續が、ある日突然の大暴騰、或は、大暴落が起つて、後ち亂高下波瀾が生じて意外の反對相場が出現する際は大抵

其翌日に樣變り相場の現象かある。

(は)。長く續いた昂進相場或はヂリ下げの關節的大巾を辿つて時か又は、ヂリ相場の中間に於て突然目立つた飛躍或は、低落が起つた場合。

(に)。月頭は相場の天井、底値が出ることが多いのであるから、前月からの上げ續き又は、下げ續きの時に、其相場がづゝと伸びて來ると、大抵四五日中に高低何れかの極點に達するものである、さうした場合にも樣變りの現象が起る。

(ほ)。相場が上りつめた結果、引締つて保合氣味の相場になつた時、或は下げつめた結果弱保合を續ける場合、又はヂリ相場の時に反動的機會があつた場合、其他休日越などの出現材料によつて多くこの樣變り相場が起ることかある。

廿八、天井と底値の觀測

天井とは相場の最高點のことで、底値とは其最低位を指すのであることは前にも記した通りであるが、之を確的に觀測するといふことは中々面倒で容易く斷案を下すことは困難であるが、凡そ高値から一ヶ月を經過して其高値を拔く相場が出ない時は大抵天井となることが多く、そして其形態にも種々一樣でないが、相場の歩調が一高一低に漸進して賣玉がずん〳〵消化されて行くと共に場面は活氣が立ち、きのふも新値、けふも新値を付けるといふ場合にあつて、相場が彌々昂進を續け、市場に賣物が途絶える傾向となつて、遂には賣方が全滅するといふ狀態となつた際は、先づ天井を打つた相場と見ても差支へない、これを季節的から觀ると、米の端境から十二月へかけて徐ろに回復した相場が三月前後まで買進んで極點に到達して天井となるか又は凶作尻を受けた春先の米に買占などが起つて春

の彼岸前後に大高値卽ち天井が出ることかある、これ等の現象は春天井或は彼岸天井と稱するのであつて何れも五六月中に下落するが普通である。次には又、春底値になつた米が五月頃に回復して高値天井を出すことがあるし、時としては大凶作尻の爲春から續いて昂騰を演じ前半期棒上げとなつて六月頃に天井を打つことがある、これを夏天井と稱する、又秋天井といふのは矢張凶作尻に起る現象であつて春以來買はれて昂進の一方を辿つた米が秋の彼岸前後に於て絶頂點に達することで、冬天井といふのは滅多に起るものでないけれど大凶作年などであると十二月中に大高値が出て前三季節の天井を拔くやうなことがある。

底値の見方も亦天井觀と同一で、只其形態を反對に解すればよいのであるが、こゝに注意すべき點は天井にはない現象卽ち、相場の亂調子が屢々起ることで且又其下揉み期間が餘程長く續くといふことから其觀測を誤ることが多いことであるこの底値も亦季節的に起るのであるが天井と違ふて夏季に於て底値といふものは

ない、春底といふのは彼岸前後の人氣が陰の極端に陷ちて、相場も最低點に達する場合のことで、こゝに底入れた相場な葉櫻季節から麥天災へかけて昂騰を演ずることが多い。又秋底は秋の彼岸前後にあるのが普通で、これは天災期の無事經過とか、豐作謳歌の賣人氣が絶對陰極に達して起るのであるから、こゝに底入となつた相場は秋穗即ち十月頃に反動相場が出る、次の冬底といふのは新米出盛の壓迫によつて相場が引立たず十二月或は一月頃に起る現象である。

……(八〇)……

廿九、米相場の極意と秘傳

附賣買の駈引法

戰爭は國家と國家との間に行はるゝ相場の大なるものであつて、人と人との間に於ける相場は戰爭の小なるものを意味するのであるから、國家が國を賭けて戰爭を開始するも人が資產を賭けて米相場を開始するも其根本に變つたことでないといつても差支あるまい、孫子の始計篇に「故經之以五事校之以計而索其情」と謂つて「一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法」と說いてゐる、之を米相場のことに當篏めると「一米自体、二天の時、三地勢關係、四人氣、五財界事情」といふことになる、卽ち一は米自体の關係から觀測する作柄の善惡及び古米の多少などを鑑ることで、二は天候の晴雨、氣溫の適否、日數、月數の熟否等を調査すること、三は地勢の遠近から及ぼす相場の關係卽ち各地米市場の動靜並に受渡關係からする運輸機關の便不便等を考ふる事、四は人氣の消長と其向背の如何、五は財界一般の事情、就中金融の繁閑、流通貨幣の增減、利息の高低、友界の消息等を意得して置くことであつて、相場を仕かける前には必ずこれ位の事を取調べて置く必要はある、其他には又自已の力量、資金の用意等は勿論必須の條件である。

先づこれだけのことを諳んじて相場界を泳ぐものは決して溺れるやうなことはな

……(八一)……

いが今一つ必要のことは賣買の時機と休止すべき時機である、それを一寸述べて見る。

……(八二)……

い、賣出動の時機

(1)、熱狂的人氣の偏倚から急激に奔騰を演じた相場が、高場になつて頭重く保合、若くは賣方の踏拔によつて更に躍進を演じた場合。

(2)、財界の變兆又は政變或は米價調節等によつて買方に不利益を齎らすことを確認した場合。

(3)、樣變り狀態を確認した場合。

(4)、安値から三割方の昂騰を演じて落付相場となつた場合。

(5)、凶作或は米カスレ又は有カスレの爲、天井知らずに暴騰が演ぜられ其際主力の賣方が踏拔で、場面總買の光景を呈した場合。

ろ、買出動の時機

(1)、豐作尻の爲、若くは思惑熱の極端に沈靜して、長期に亘り、市場の人氣が引立たず、又は底値の保合を持續して、其際限がないやうに感ぜしめた場合。

(2)、一度底値保合を放れて相場が、案外に呆け味となつて伸力鈍く、人氣も亦戻り賣りの持久となつて、兎角賣逸りの場面となり、更に嫌氣投けの誘起で一押しがあつた場合。

(3)、米價調節其他政府筋などの强壓的材料によつて崩落を演じた後に於て落付の相場を現はした場合。

(4)、相場の飛放れがあつて、樣變りの狀態が確認せらるゝ場合。

(5)、高値より三割方崩落となり、落付後の反抗的採合となつた場合。

……(八三)……

は、賣買休止の時機

(1)、相場騰落の原因が不明で仕かけ又は手仕舞に迷ふ場合は餘程注意せないと失敗する、判斷のつかぬ相場は儲かつても紛れ當りである、かやうの時は休止せなければならない。

(2)、賣つても買つても失敗の續く場合は必ず一旦休止しなければならない人間の情として曲つて來ると益々焦る氣味が生じて來る爲め彌々標的がわからなくなる、從て逆へ逆へと廻るやうになる、相場に反對する立場に廻つては迚も其頽勢を盛返すことは覺束ない、それは何故かといふに自己の頭腦が冷靜を失ふて、相場を判斷する能力が鈍くなつて來るからである、斯樣の場合は是非とも休止せなければならない。

(3)、見込のたゝない保合相場はなる可く仕かけない方が安全である、斯樣

の場合は精神の疲勞のみ多く、大抵得る處がない、こんな場合に仕かけ玉があると愈々氣迷が生じ易く、保合放れの大相場となつた際に於て乘遲れとなる事が往々ある。

(4)、相場の上り足が短かい時、又は、下げ足の短かい時は、大抵相場の進行力を抑制する上値待ちとか或は、押目待ちの買物が潛在してゐるといふことを暗示する證左であるからかやうな足とりの相場は仕かけぬ方がよい、若し仕掛た米があつたら、手仕舞する方がよい。

三十、相場の金言と諺語の解說

(1)、上弦と下弦說。

これは曆から出た諺語で月の弦即ち、舊曆の毎月初旬にある上弦と、下旬にある下弦の大相場をいつたもので、上弦は仕かけか多く、下弦は手仕舞が多いと

いふことから上弦相場は變動か起り易く、下弦相場は居据り保合が多いといふ事である、「上弦は起きて働け、下弦は寢て待て」などゝいふのも同じ意味である。

……(八六)……

(2)、柳に米が實る。

柳の葉の繁茂如何によつて年の豊凶を卜する古來の慣習觀で、柳の葉のよく茂る年柄は稲作が良く大抵豊作であるといふ意である、農家は年々柳を挿木して其成長の如何によつて作柄の豊凶を判斷するなども同じ意味である「稲は柳になる」ともいふ。

(3)、枇杷麥判斷。

枇杷の實の豊穣なる年柄は麥作も亦豊穣であるといふ古來の見方。

(4)、豊年は海から。

海産物の豊富なる年柄で特に鯨が多く捕れるとか鰯の多く漁れる年は稲作も佳良で大抵豊作を觀る事になるといふことである、これは肥料か安くなつて施肥が充分であるから稲が良く實入といふ所から出てゐる。

(5)、利喰損難。

相場を行るものは、其賣買に多少の利益が乘ると早く手仕舞ふ事を考へ、損計算となる相場はドコまでも追かけるといふ關係から、遂には大損害を蒙るやうな事になるといふ事を戒めた一つの諺である。

(6)、空臼を踏む。

高値で買い、安値に賣込むの意で、目先相場の判斷を誤つた爲に往々遭遇する實例がある、即ち其結果がよくないといふこと。

(7)、天井掴み、底叩き。

これは前項と殆んど同意である、最高の極を買つて、最低値段を賣ることを謂つたもので、相場の觀測を誤まつた者を諷刺するのである。

……(八七)……

（8）、天井賣らず底買はず。

相場を行るに就て餘りに慾張るとよくないといふ諷刺的の言葉で、最高値段で賣玉を仕掛るとか、最低値段で買玉を建やうといふ考へは却て好機會を囚い難いものであるから、それ等の呼吸をよく呑込んでゐなければならないといふことである。

（9）、理外の理。

相場の高低を確實に認定することは勿論困難な事であつて、材料よりも人氣關係から變動が起ることが多く動もすると材料に逆行するやうな相場が出ることがある、かやうな相場を理外の理といつてゐる。

（10）、利喰千人力。

相場に利の乘つた場合轉賣買戻をやつて先づ利益を收得することは非常に力となるものであるといふことであるが又大手筋が利喰した後ちに行ふ賣買は非常に有力であつて當る可らざる優勢を示すといふことにも用ゐられる言葉。

（11）天井一日底百日。

凡そ買人氣が其絶頂に達した時は、所謂沸騰相場を現出するが例で、人氣は彌が上にも狂奔するものであるがこの相場は決して永續きするものでなくほんの僅かのうちに天井を極めて仕まふけれど、之と反對に低落を演じた相場であると案外長く上向けないで安値に保合ことが多く、動もすると百日位も底値で揉合ふやうな事もある、これを天井一日底百日といふ。

（12）、人氣の裏を行く。

市場の人氣か或る一方即ち賣に偏傾してゐる場合は既に底値を現はしてゐる時であるから買に廻るが利益であつて、又人氣か買の一方に偏倚つてゐる場合は天井に近いことを暗示してゐるのであるから、賣に廻つた方が有利であるといふことである、即ち人氣の逆相場を遣ることで又一種の逆向ひである。

もうはまだ也。

……(九〇)……

もうは(まだ也)の反對語で、即ち自己の建玉が其方針を適合して利益を見る立場になつた際、「もう」利喰をしてもよいといふ考へが起つて來るのが人情であるが、かゝる場合は「まだ也」といふ觀念を以て利喰を急いではならないといふことで又、相場が「もう」絶頂であるとか或は底値であるといふ考へが起つた場合に、「まだ也」といふ反對の方面から一應見なければならないといふことで、之に反して損失が生じた場合は「まだ也」といふ考へが起るのが人情であるから「もう」といふことを顧みて見切らなければならないといふことを戒めた言葉である。

(14)、戻り賣りに戻りなし。

下げ相場一本調子の場合に於て、戻り相場を待つといふ人氣に一致してゐる際は相場は皮肉に戻りを見せないのが例で、この反對の場合即ち上げ一本調子の場合に於て押目を待つといふ人氣に一致してゐる際は押目がないのが例である。

(15)、雨を買い雨を賣る。

雨を買ひといふのは米の出來秋に降雨があれば收穫が減少する慮れがあつて結局米相場が騰貴することになるといふ見地で晴天を賣るのは之と反對である、又逆に雨を賣るのは惡天候に逆向ひするといふことで、足駄履て米賣れといふのと同じ意味である、惡天候を賣り、惡天候を買ふといふのも同意で、仕手の意識を忖度した諺である。

(16)、腹八分。

相場に利の乘つた場合は勝誇る氣分が生じ易く不知不識の間に深入して安りに玉を殖すやうなことは戒めなければならないといふことで、總じて十二分の相場は行るものでないといふ諺である、即ち腹一杯の相場はするなといふ事。

……(九一)……

(17)、賣る可し、賣る可らず。

賣るべき相場であつて、而も賣つてはならないといふ場合がある、亦其反對に買ふべき相場であつて買ふてはならない場合がある夫を買ふべし買ふ可らずといふ。

(18)、風三日。

稻作の三大厄日で即ち二百十日、二百二十日、二百三十日の三日間のことで、この頃は早稻、中稻、晩稻と順次開花する季節であるから、若し暴風雨などがある時は、作柄に大なる影響を齎らすことになる、かゝる場合は、其被害の實情が大凡三日後に於て判明する筈であるから、妄りに巷説を信じて賣買をやつてはならないといふことで、これを戒めた諺である。

(19)、庚申安、甲子高。

これは古來の相場觀で、庚申の夕に相場が上向いた時は、翌日の乙酉の日に低

落し、庚申の夕場が下がれば翌乙酉の日に相場が直るといふことゝ、新年の初甲子に相場が上向くと六月まで相場が上げ續けるといつた見方である、又秋の甲子に相場が上向くと己巳の日まで高歩調となり、反對に下向くときは矢張り己巳の日まで、安歩調を辿るといふ。

(20)、見ぬが花。

相場の材料は潜在してゐるうちが、値打ちで公に表はれてしまふと却て相場が反對の歩調を示すやうな事が多いといふことで、つまり、強弱の材料は潜めるがよいといふ諺である、然し之は一概にさうとは限らない、材料にも色々あつて、寧ろ公表されてから相場が大變動を起すやうなこともある、例令ば收穫の豫想發表などは數字が現はれてから大波瀾を惹起することが多い、又天變地妖などもその通りである、この諺は要するに局限的小材料のことをいふのであらう。

三十一、天氣の豫測と俚諺

……(九四)……

天氣の良否といふことは米相場に大なる關係を有するもので、氣候の順、不順或は早魃、暴風雨、霖雨、洪水、海嘯、地震、其他の災害が及ぼす處は決して少なくない。就中、天災季節にあつては天候の如何によつて相場の騰落が起るのであつて天氣が相場を支配するといつても不可ないのである、勿論今日の天候豫測は測候所のあづかる所で學理上からの豫報は毎日發表され、又警戒を要すべき場合は警報を發せらるのであるから、左迄不便を感ずることはないが、古來俚言、諺語として傳はるものに可成正確に豫測されるものもあるやうで、中には學理と一致する有力のものもあるから、相場を行る位の者は一通りそれを知つて置た方がよい。

い、朝燒即ち朝の空色が赤くなるのは、風か雨かの徵で、夕燒即ち、夕方の空色が赤くなるのは晴天の兆である、又朝空の灰色は好晴の兆で、夕の灰色は大体降雨する。

ろ、大陽が赤いのは雨氣をもつ徵候で其色が濃厚になれば屹度雨が降る。

は、月色の青いのは雨、赤は風、白は晴天の兆である。

に、雲が高く昇るのは上日和の兆で、雲の低く動搖するは雨の徵候である。

ほ、初夏の雷鳴は土用の知らせで、初冬の雷鳴は雪おろしである、又彼岸過ぎの雷は早雪の兆で、晩秋の雷は小雪の兆、十二月の雷は大雪の兆である。

へ、朝虹は雨の前兆であるが夕虹は晴天を意味する、俗に夕虹百日の旱などゝいふ、若し白色の虹が見ゆれば凶作の兆といつてゐる。

と、星の光りが強いのは雨の兆で、流星の多いのは大風の徵である。

ち、西廻りの風は天氣がよく南廻りは雨の兆。

り、曇天の長く續くのは長雨の兆で、短かい期間の曇天は短期の雨である。

……(九五)……

……(九六)……

ぬ、日光のキラ〳〵して驟雨が降れば翌日もまだ降る。
る、露が多いときは晴天で、少ないときは降雪の兆である、霜も同斷。
を、霜の後に霧の下るのは風か雨の兆で又、夏霧は晴れ、冬は雪である、又春と
秋の濃霧は天氣のよい兆である。
以上か普通の天氣見方で、又諺語俚言として傳へらるゝものは概ね左の如きもの
である

遠寺の鐘が判きり聞ゆるは雨。
音響が廣く遠くまで傳はるは風雨の兆。
煙りが眞直に上るは晴で、低く棚曳は雨。
室内に煙のこもるのは雨。
溝や池の何時もより惡臭を放つのは風雨の兆。
猫が耳越しに顔を撫でるのは雨の兆。

犬や猫の草を喰ふのは雨。
羊の垣根に寄りたがるのは雨風の兆。
厩の馬が頭を振るのは雨。
馬が嘶くと天氣がよい。
牛が吼るのは曇天の兆。
山燕が出るのは雨の兆。
燕の飛び廻るのは雨。
家禽の騒ぐのは雨の近い兆。
鷄の晩くまで塒に登らぬのは雨の兆。
鵜鳥が鳴けば晴天となる。
雀の群立ち騒ぐのは風か雨の兆。
水禽の大群が飛來するのは大雪の降る兆。

……(九七)……

……(九八)……

鳶が川の上で舞ふと晴れるが。高く飛ぶのは風、其鳴くのは雨を知らせる、
又朝鳶は雨、夕鳶は晴で、鳶の鳴いた日に鳩が鳴けば百日の旱である。
烏か細い枝に巣ふ年は無難の兆で、烏が大樹に巣を作るのは大風の兆である。
鴉の巣が高い年は洪水を知らすのであつて、其短いのは暴風を知らす。
鴉の群が早く森に返る時は翌日晴れる。
梟の鳴き聲が「のりつけはせ」と聞えるときは晴天の兆で、低く鳴くときは雨。
雉子が地を搔て鳴く時は地震がある。
鷗が陸へ群れるのは暴風雨の兆で、海原遠くへ去るのは晴天の兆である。
鵲の贄が高く藏さるゝときは雪多き年。
雨蛙が鳴けば雨が降る。
蛇の木に登るは雨の兆。

虹蚓の鳴くのは晴天の兆で其地上出るのは雨の兆である。
蟻が穴を塞ぐのは霖雨の兆で其巣を替るのは大雨の兆である。
羽蟻の出るのは天氣のよいしるし。
蜂の巣の低い年は暴風がある。
赤蜻蛉の群集するのは晴天。
蟬の早く出る年は霜が早く來る。
夜の蠅は雨の兆。
梨の花の多い年は水害がある。
狂い花が咲く年は凶歉。
南瓜の蔓が早く括るゝ年は雪が早い。
柳の花の多い年は洪水がある。
雨の多い年は栗が良く、雨の少ない年は柿がよい。

……(九九)……

麥の初葉が長い年は大雪が降る。
辛夷の花の多い年は雨が多い。
蔓物の短かい年は秋揚げが惡い。
竹の花がさけば凶年。

この種に屬する諺語、俚言は隨分澤山あるのであつて一々茲に上げると際限もないのであるから、先づこれ位の處であとは省略する。

……(一〇〇)……

三十二、各種の相場觀測法

相場觀測に關する事柄は既に記述を終つたのであるが茲には又別種の觀測法として一般に利用せらるゝ以下の問題を上げて小解を試みる、利用するとせぬとは勿論讀者の御勝手で、私はこれ等の方法を御薦めするのではなく、只參考までに書くのであるから其邊誤解なきやうにお斷りして置く。

い、周易と九星

周易及び九星から相場を觀測する方法は昔から行はるゝのであつて、現今にあつても盛んに利用されてゐる、周易とは占筮卽ち八卦のことで、これには六十四籖の異なつた卦があり、本筮といふものは餘程面倒のものであるが、普通に用ゐられるのは畧筮と唱へ五十本の筮竹を以て其數を分ち、四本づゝ二度數へて其殘れる筮竹の數によつて卦を定めるのである、卽ち一本餘れば乾爲天の卦となり、二本餘れば兌爲澤の卦となる、三本が離爲火で、四本が震爲雷、五本が巽爲風、六本が炊爲水、七本が艮爲山、八本が坤爲地となるのである、之に由つて下卦を立て更に同樣の方法を繰返して上卦を立てる、而してこの八種の卦象が相錯綜して六十四種の變化を生ずるのである、相場の觀測は其成卦によつて高低を判斷するのであつて例へば火地晋といふ卦象が現れゝば米相場の暴落を來すとか、又は山

……(一〇一)……

地剝の卦象が立てば暴落の兆があるといふが如く、其卦象の如何によつて判斷を下すのであるが可成複雜であるから素人には面倒な仕事で、專門家から觀測して貰ふより外はない。この周易の外に梅花心易(五行易)などゝいふのもあるが要するに大同小異で、其根本には變りがない。又九星といふのは、この易から胚胎して來たもので、矢張り一種の易である、之は一白、二黑、三碧、四綠、五黃、六白、七赤、八白、九紫といふ九箇の星を基調として、年々、月々、日日の相塲を判斷するのである、例令ば一白の月にあつて九紫の日は高下が激しいとか、三碧の月には七赤の日に大瓦落があるなどゝ判斷するのである、この九星術は案外に簡單であるから素人でも少しく練習すると容易に會得することが出來る。

……(一〇二)……

ろ、干支と五行

これは暦日に配せられた十干即ち甲乙丙丁戊己庚辛壬癸、及び十二支の子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥から相塲の高低を判斷する方法で、例へば甲子の日は寄付安の引高とか、丁丑の日は相塲が引締つて、變動含みであるなどゝ判斷するのである この方法も極めて簡單であるから、少しく練習すれば誰にも出來る、又五行觀測といふのは各日に與へられて火水木金土の性質によつて相塲の高低を豫測するのである、この五行觀測の進歩したものが七曜應用といふのであつて、五行星の外に日と月とを配置して、日曜日を太陽星、月曜日を太陰星、火曜日を螢惑星、水曜日を水星、木曜日を歲星、金曜日を太白星、土曜日を鎭星と名命してゐる、而して日曜日は市塲が休日であるから除いて其他に就て小解すると太陰星は陰性であるけれども其性質が強いから、相塲が變化することが多く、土曜日の相塲が安かつた塲合にも高放れすることがある、次の螢惑星は人氣が強く大体高い相塲が出るが、後塲は逆に安い相塲となる、其次の水星は前塲保合ふても後塲に放れることがある、歲星は陽星であるから大体强含みの相塲で材料次第で意外の高値が

……(一〇三)……

出ることがある、又太白星は強い星であつて且變動含みであるからこの星の日は相場が變化することが多い、鎭星は又動因に乏しい星で大抵保合ふやうな相場が多く、大体伸力の鈍いのが普通であるといつた類である。

……(一〇四)……

は、數理觀測法

これは數理學上の原則から立脚して相場の高低、變化を捕捉するといふ方法であつて、過去の相場の最高點即ち天井相場と、最低點即ち底値及び其高低の反動點と極點とを數理上から打算して將來の相場を豫測するのである、これには可なり澤山の手段があつて一々茲に上げるわげに行かないが大体其根本は單つで、高値天井に問へて低落する相場は第一回に何分方低落して更に引返し第二回には何分低落する、又其反對に底値から起上つた相場であると何分方上げて更に落すといふやうな事で何れも大向小異である、併しこの數理觀測なるものが果して而く確實のものであるか怎うかは疑問で、其他三角觀測、幾何觀測などもあるが其効果は深く信じられない、この方法は私も調べて見たが研究が足らない爲めかドウカ餘り適中しない。

に、循環法

循環法は罫線上から見た相場の歩みを一ヶ年又は、三ヶ月毎に區切り、上値から、下値へ、下値から上値へと往復する經過期間の平均率を土臺として相場を觀測する手段であるが、物には凡て循環する性質があつて、或る出發點から、或る到着點に達した場合は、更に出發點へ歸り、再び出發して、到着點に達するといふ說を利用して相場の高低を判斷するのである、假令ば本年の發會相場を出發點とすると、六月下旬の高値が到着點であつて更に九月下旬歸着點となるといふの類で、其循環率の割出し方は可成複雜であるから動もすると誤算し易い爲め餘り

……(一〇五)……

應用してゐる人はない、還元法といふのも同一の理から考へた方法で大同小異の觀方であるが、これも餘り應用されてゐない。

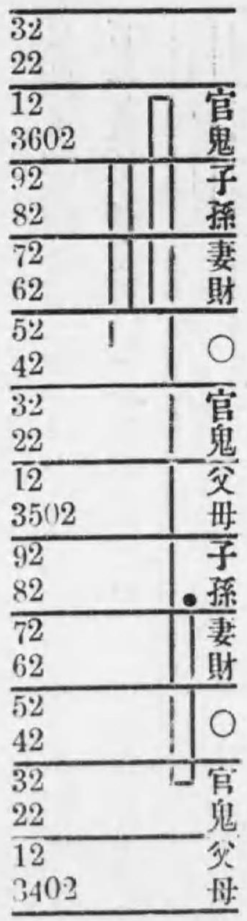
ほ、五行星座法

この五行星座法といふのは、五行易の六親法から出たもので、所謂、父母、子孫財、兄弟、官鬼の五つと月とから成立つ觀測法である、卽ち我を生ずるものを父母と爲し、我が生ずるものを子孫、我から剋するものを妻財、我と比和するものを兄弟、月となし、我を剋するものを官鬼とするのであつて、この六親を五行星に配するのである卽ち五行の中の水から言へば、我を生むものは金であるから金は卽ち父母となり、又我が生むものは木であるから、木は卽ち子孫であると爲すの類で相生、相剋の理から相塲の騰落を觀測しやうといふに外ならないのである、この觀測方法は私も多年研究してゐるのであつて、稍正確の觀測が出來得る處まで運んでゐるのであるけれど、未だ研究に足らない所があつて百發百中といふ域まで達して居ないのは甚だ遺憾である、然し新潟市塲あたりでは可也この觀測法を應用してゐる人々もあるのであつて、官鬼は怎うかとか妻財に底入たなどと言つてゐる人もある、これは月々一表を作製して置き、相塲の足取り卽ち罫線と併用するのがよいのであつて、月々の相塲生れ値を發足點として一々表に罫線を引くことになつてゐる、卽ちこのやうなものである（官鬼星座の巧妙なる作用を見よ）

東京期米觀測の一例（十五年十月初旬實例）

4!		
31	官鬼	
21		
11	父母	
3701		
91	子孫	
91		
91	妻財	
61		
51		
41		
31	官鬼	○
21		
11	父母	
3601		
91	妻財	●
81		
71		○
61		
51	官鬼	
41		
31	父母	
21		
3501	子孫	
11		

新潟期米觀測の一例（十五年十月初旬實例）



……（一〇八）……

三十三、市場用語解說

米穀市場に用られてゐる特殊の常套語は可成多くあつて、これを一々知つて置かなければ相場をやる際に洵に不自由な計りでなく、新聞紙其他の相場記事を見る際にも甚だ不便である、これは相場界に出入する人は勿論其他の人々でも一通り知り置く必要があるのであつて、常識といふ點からしても決して無用のことではない、普通この類の書冊に載つてゐるのは其解說が餘りに簡單過ぎて、當等者以外の人々に譯りかねやうなことがある、私はその點を考慮して何人が見ても了解が出來得るやうに詳解して其欠陷を補ふことに努めた、以下五十音順によつて之を配列する。

あ之部

秋相場。

九月から十一月頃までの米相場のことで、この頃は年を通じて一番波瀾が多く相場する人の書入となつてゐる。

秋底。

秋の彼岸前後に於て天災期の無事經過或は、作柄譽の爲、相場が低迷してゐる際に、何かの强材料が出て反動が起ることがあつて、動もすると相場の最低値が極ることがある、これを秋底といふ。

……（一〇九）……

秋穂相場。

作柄の大勢が定まる時期を斯くいふのであるがそれは、凡そ九月下旬から十月頃に亘る、天候關係などで、豫想外の相場か出ることかあるから、この季節に相場をやる者は餘程注意せなければならない

惡材料。

相場の騰勢を阻害し或は暴落を演ずる如き動機を齎らす材料のことで、假令は政府の拂下げ米とか、殘存米の豊富、又は作柄豫想の良好、惡米過多などゝいふのは何れも惡材料と稱すべきものである、惡資料ともいふ。

灰汁拔け。

伏在した惡い材料が出盡して、消散した場合卽ち下げ相場が一段落となつて順調に回復することになることである。

腮刺。

賣方又は買方の一方が其相手方の計畫を知つて其裏を搔くことを腮刺といふのであつて、例へば、客筋の内幕などを知つた場合に於て其欠陷を利用して反對の立場に廻り、相手方を苦しめることで、成金などの横暴を懲さんが爲めに取引員が連合してかゝる動作に出ることもある。

足取り。

相場の歩みのことで、之を一表に作製して置き既往の相場から判斷して將來の相場變動を豫測するに用ゆるものを足取表といふ、この足取表の見方は餘程熟練を要する、この表を利用して相場の賣買方針を定めてゐる者を、足取屋(罫線家)といつてゐる(十九、二十項を參照)

足拾ひ。

相場が次第に上向く場合、飛び放れ相場が出た後に、上げ惱んで押し來り、前の飛び相場近くへ來て、又下げ澁り、結局昇騰を演ずるといふ相場を斯く

いふ。

足元を見透す。

これは相手方の賣買玉の限度を見透すことであつて、假令ば賣方が千石丈けの注文さか持たない場合に、一方の買方は千五百石を買建てゝ、賣方を脅かし、賣方に思ふやうな相場を付けさせないといふ手段をとることで、買方に對する賣方も亦同樣の手段で賣浴せをやることがある。

足を出す。

相場に失敗した損金の決濟が出來得なくなつた場合のことで、單に足ともいふ

頭打ち。

相場の氣配の何となく重々しいことで、卽ち上げべき形であつた相場が頭を叩かれて上げ得なくなつた狀態にあることをいふ

當り屋。

連續的に相場を利する人のことで、賣つても買ふても順調の立場にある者のことである

浴せる。

浴せるといふ言葉は賣方が買方よりも優勢の立場にある場合にのみ用ゐらるゝ、卽ち買方の出鼻を叩いて之を威壓するといふ意味になる

煽る（煽り）。

相場を變動させるといふ目的から遮二無二に賣買をやる人爲的相場のことで之れは上煽（買煽）と下煽（賣崩）の二種があるが、單に煽ると云へば主として買の方に用ゆる

雨買と雨賣。

惡天候を其まゝ材料として買相場をやることゝ其反對に材料を逆用して賣相

場をやることを云ふのであつて、「足駄履て米賣り、草履はいて米買ふ」なども同意味である（三十項參照）

……（一一四）……

有かすれ。

これは正米の缺乏を云ふのであるが、實際に供給力が不足してゐるのでなく天候の關係などで米作が悲觀されてゐる場合にあつて、一時的正米が影を潜めることをいふのである即ち假需要が旺盛である爲め、前途高を見越して米を賣らないといふことを意味する、農村の賣惜みなどは其一例である。

青田。（青田賣買）。

六、七月頃の植付が終了した後の稻田を青田といふのである、この頃の作付に於て、先約賣買が行はるゝことが多い、それを青田賣買といふ、北國、越後地方によくある賣買方法で、何圓手金、十月下旬取引などゝ新聞に掲げてあるのが卽ちそれである

青田（あをた）譽（ほ）め。（青田崩（くづ）れ）。

青田時代になつて、植付が充分であると稻作の順調を謳歌されることが毎年の例である、その狀態が漸次良好に進んで來ると一層出來秋を樂觀することになるが人情で、米穀市場は賣人氣が優勢になる爲め、兎角すると相場を低落せしむる傾向に陷り、動もすると暴落相場を演ずるやうな事がある、それを青田崩れといふ

操（あやつ）り相場（さうば）。

これは腮刺の大がゝりのものであつて、一名客殺しなどゝ唱へ取引員が客を相手に、輸贏を爭ふ際などに、よくやる手であるが、大仕かけのものになつて來ると數人の取引員が共謀しして相手方を苦境に落すやうなことが間々ある、一例をあげて見ると、こゝに或る客筋があつて、小資本の元手から僥倖を續けて大利を收得した際に於て、其人が取引員の反感を買ふやうな事柄を

……（一一五）……

生じた場合とか、又は取引員同志に餘り好感をもたれない一取引員が俄かに大儲けして得意になつてゐるなどゝいふ事から同業者に憎まれる場合には、數人の同業者が一致行動を採ることを約して其憎んだものを沒落させんと謀り、其者の玉が賣りであると反對に買立て、又買玉であれば賣浴せるといふ工合に反對〳〵と廻つて相場を操つるのであるが、其憎まれた者が尙續て僥倖を得た場合は、却つて操つたものが反り討ちになるやうのこともあるが、大体は憎まれたものゝ方が負けることが多い、地方の取引所には餘りかやうなことは行はれないけれど蠣殼所や堂島の米市場にはよく行はれる、卽ち一種の人爲的相場である

い、（え、ゐ、ゑ）之部

一陰、一陽相場。

相場が上つて後ち毎節下向き、日數五十日以上、若くは三ヶ月にして、天井値から一割以上の安値を顯す相場のことを一陰相場といふのであつて、この反對に、相場の底入した後に於て、一割以上の上があり、更に日數五十日以上、月數三ヶ月以上に跨る相場の足取りのことを一陽相場といふのであるが卽ち兩者の形は反對であつて、意味は同一である

一月限。

一月限は本年の十一月發會して翌年の一月末を限り受渡を終了する限月のことで、略して一限又は一切ともいふ、この限月が當限へ廻るころは、大体陰曆の年末に當る爲め、舊正月の準備其他納稅の關係などから一般に現金の必要があつて、農家は手持米を賣出す傾きがある爲め、米相場は自然的低落の狀態となることが多い

一頓挫。

相場が昂進の狀態にあつた際、利喰其他の材料によつて突如低落する形勢に陷ることを斯くいふのである

……（一一八）……

一部解合（ぬけ解合）。

賣方の或る一部と買方の或る一部が、合意によつて其賣買玉を解けることを斯くいふ

一定値段。

これは米穀取引所の帳入値段のことで、平均値段ともいふ、前日後場から、當日の前場までの各限月につき賣買總値段を、賣買總高に除して得たもので あつて、計算上、取引上の便宜から毎日之を統一することになつてゐる例へば一定値段三十五圓五十錢といふが如し

挑合ふ。

これは賣買兩者が互に有利の相場をとらんとして、賣買を競ふ狀態の形容詞である、一種の保合型と見てもよい

厭氣賣り（嫌氣投げ）。

買方が其建玉に嫌氣さして、轉賣することを斯くいふのであつて、かうした賣物が多く現はれると相場が暴落するやうな事になる場合がある、嫌氣の投げ物などともいふ

入引。

入引といふのは賣方と買方が取引所の帳入後に於て相對づくに轉賣買戻しを行ふてお互の玉を預け合ふことで蠣殼町市場などに行はれる不法の行爲である

煎れ、（煎れ米、煎れ相場）。

煎れとは賣方にある者が損失を見切つて買戻しをすることであつて、これもその玉が多く市場へ集まると暴騰相場を惹起することがある、踏み上げなど

……（一一九）……

〻も同意で、煎れ退く、煎れ米などゝ稱し、米相場の專用語である

……(一二〇)……

違作。

農作の豐凶觀測が誤つた爲め曩に謳歌された農穰見込が外づれて鎌入不足などが持上る場合をいふ

居据り。

相場の變動が起らないで保合の狀態にあることである

う之部

浮足(浮足立つ)。

相場高低の步調が亂れて變化の測定が六づかしい狀態にあるを形容する言葉

浮腰(浮腰連)。

前項の關係から賣方も買方も宜く見送つて手を控へる態度にあることで、相場の賣買が一向氣乘せないといふことである、又かゝる狀態にある人々を浮腰連といふ

受米筋(實彈筋)。

定期米を買つて正米を取らうとする手筋のことで、主として正米師などを指す

受米攻め。

渡米の不圓滑を見すかして强て受米するが如く粧ひ、賣方を脅威することをいふ

薄鞘。

當月限と中月限、先月限の値鞘の開きが少ないこと

薄敷(薄張り)。

薄敷といふのは、一定の證據金を納めないで僅少の當て金を以て、相場をす

……(一二一)……

……(一二二)……

ることであるから、やり方に依つては所法に反することゝなる、かやうな手筋を取扱ふ店を薄敷屋と唱へ、俗に呑屋ともいふ、地方の取引員にはかゝる類のものはないけれど蠣殼町などにはザラにある

内氣配(内景)

これは「ないきはい」、「ないけい」ともいふのであつて、取引所の立會終了又は休會等に於ける人氣によつて相場の見當をいふのである

打止め。

立會の終了卽ち毎日の最後立會、大引のことである、昔はこの打止を稱して東京は「とんとん」大阪は止めといつてゐた

鰻上り。

相場のヂリ〳〵騰貴の狀態を續けることをいふ

上押す。

これは文字の關係がチト穩當でないが、相場の騰貴することをいふのである

上鞘。

上鞘といふのは當限、中限に比較して先物が高い場合のことで卽ち順鞘のことである

上寄り(上放れ)。

本日の寄付値段が前日大引より高かつた事を斯くいふ

上向く。

相場が騰貴の狀況を示すこと

上行く。

相場の漸次昂騰する形勢にあること

生れ値(發會値)。

各限月が最初發會した値段のことで、卽ち新甫の初値段のことである

……(一二三)……

恨み相場。

これは賣買兩者の或る一方が敗戰して、白旗を擧げた後とか又は解合があつた直後などに起ることのある反動相場のことで、買方の恨み相場とか賣方の恨み相場などゝいふ

賣明。

手許に米がないのに拘はらず米を賣ることをいふのであつて即ち空賣りのことである

賣埋(賣戻)。

買方が其建玉を手仕舞ふ爲に賣つて手持玉を相殺することを斯くいふ

賣思惑。

主として投機の賣物、卽ち、將來低落を見越して利益を得んとする行爲

賣方。

これは二通りに解譯が出來るのであつて、例へば取引所の賣方といへば賣玉を有する取引員のことであるし、又客の方から謂つたら、賣玉を建てゝゐる者といふことになる

賣冠せる。

賣冠せといふのは賣浴せるといふのと略同意であるが主として賣玉を多く出すことに使用されてゐる

賣崩し(賣崩す)。

これは本來米を買占んとするものが、先づその値段を低落させて、一擧に買攫はんと欲する爲、極力賣るやうに見せて置き、他の者が夫れに乘つて賣つて來る機會を待つといふことに應用される一策である、併し今日ではさうした意味でもなく、大概自己の賣建玉を擁護する爲に無理無三に賣物を出して相場を崩すといふ場合が多い

賣材料。
　卽ち米を賣るべき原因となる資料のことで、惡材料又は、弱材料ともいふ
賣慕ふ。
　賣りたがる人氣のこと、兎角賣が進むことをいふ
賣澁り（賣澁る）。
　市場の買物に對し賣玉が割合不足する狀態
賣順。
　賣方に對して相場が好都合になつてゐる場合を斯くいふ
賣透す。
　賣建てある玉の一部を買戻して荷を輕くすること
賣過ぎ（賣過ぎ反動）。
　市場の賣行爲が非常に常軌を外してゐるといふことで、例へば前項にある賣崩しの不成功などから斯る現象が起ることがある、爲に反動相場が現れて暴騰を演ずるやうな事がある之を賣過ぎの反動といふ
賣進む。
　賣方か進軍することで賣走りともいふ
賣叩く（賣叩き）。
　賣方が買方を窮地に陷入れとして不當の賣行爲をなすこと
賣玉（賣劵）。
　卽ち賣建のことである
賣繋ぐ（賣繋ぎ）。
　之は一方例へば當限に買建た米を先限に賣るといふやうなことであつて、主として正米を買つて期米を賣るといふ場合をいふ
賣直し。

一旦買戻した米を、更に賣建ることで、利喰後の買直しなどが即ちそれである

……(一二八)……

賣平均。

賣玉に損失を生ずる場合に行ふ手段で、相場に不利なる場合更に賣玉を増して損失を平均することで難手賣といふのがそれである

賣拔く。

相場の高低又は、損失の關係を度外して建玉を轉賣することをいふ

賣退く。

買建てた後相場の低落し尙其後の見込がつかない場合に、一先手仕舞することをいふのであつて、賣拔とは異なる

賣乘せ。

乘せるといふことは機に乘ずるといふ意味で、賣玉に利が乘つた場合、尙先安の見込があれば賣玉を增加して巨利を占めんとする手段であつて、買の場合にも同樣の手段とる、これを買乘せといふ

賣覗く。

米を賣つて市場の形勢を觀望すること

賣逸る。

市場人氣が弱氣に傾いて兎角賣らんする狀態にあること

賣向ふ。

これは買玉に對抗する意味に賣建をなす事で、又客の買注文などに向つて賣建ることをもいふ

お(を)之部

……(一二九)……

押目(押目買)。

押目といふのは一度底入となつた上げ大勢の相場が行進中、買方の利喰などによつて、再び低落を見せ、それ等の賣物か了ると又上の方へ穩健の足を運ぶ相場の足取のことで、即ち昇騰相場の中間に一時引落しを見せることである、この押目相場は上げ相場の初期、中期に多く起るが、大きな上げ相場であると大抵一本調子に行悶へるまで奔騰するといふ場合もあつて殆んどこの押目を見せないことがある、かやうな形態ににになる相場をさして押目待ちに押目なしといふ、(戻り賣方に戻なしの反語)、この押目を買狙ふのが押目買である

押す(下押す)。

相場昇騰中に一寸した低落を見せることで、押目と略同意である

落込む(追込む)。

これは前項と異なり相場の低落する意味に用ゆる言葉

落着く(落つき相場)。

波瀾相場が一巡して後ち安定の形となる事で概して奔騰後の人氣安定に用ゆる

追かけ賣。

賣思惑の順調に進んだ場合更に相場を追かけて賣ること

追證(追證據金)、(追敷)。

相場變動の爲、賣買の何れかゞ、當日の一定値段に比して、本証據金の半額を喰込んだ場合に差入れる現金又は代用品のことで、客方からは取引員へ、取引員は、取引所へ納入して取引の安全を計ることになり、尙又相場が激動する場合であると即敷と稱して即時追證せらるゝこともある

大鞘。

大きな上下鞘のことで、主として限月の當、中、先の鞘開きのことに用ゐ又

は各地相場を對照にも用ゆる、大上鞘、大下鞘といふ類

……(一三二)……

大手、(大手筋)。

常に多數の賣買を行ふ市場有力者のことである

大保合。

相場が小幅になつて、殆んど蠢動し、上へも下へも行けないで長く保合ふてゐる場合をいふ、大巾保合とは異なる

大解合。

大玉を解合ふことで先づ一萬石以上の解合は、大解合である

大ドタ。

單にドタといふのは十錢、二十錢といふ丁度のことであるが大ドタといつたら、五圓とか七圓とかいふ圓丁度をさす「値段の用語」

大引。

立會の終了即ち最後の立會をいふ(との部止めを參照)

お祭り相場。

亂高下にて市場を賑はす相場のこと

思惑(思入商内)。

思惑といふのは大抵三ヶ月以上の成行を豫想して賣買を行ふことをいふのであつて半歳以上に亘る賣買は長思惑といふ、常にかやうの賣買を主眼とするものを思惑筋又は思惑師などゝもいふ、又眼先短期間の思惑を提灯賣買などゝいふ、(九項米相場思惑參照)

か之部

好況(好景)。

相場の景氣の良好なることをいふのであつて好勢、好望なども同意味

……(一三三)……

好順（好順氣、上順氣）。

天候の順調が續いて良好を認めるといふこと

……（一三四）……

高人氣。（タカ人氣）。

相場が強さうで人氣の良い事

硬派。

硬軍又は強氣などとも稱し主として買方をさす

高報。（高傳）。

各地市場の高い電話又は電報があつた事をいふ

格付け。

標準米に對し代用米の直打をつけること（七項標準米と格付參照）

駈引賣買。

自己の買建玉に對して商内の駈引をすること

園ひ米。

農家の貯藏米をいふ

籠拔け。

賣又は買の建玉を增加する如く見せ、實は反對の方面から手を廻して建玉を減ずる一策で筒ぬけなどゝもいふ

頭重。

頭重（ヅオモ）といふ相場が上げ模樣であつて上げ得ない形容をいふ

頭閊へ（ヅツカヘ）。

賣物に閊へて相場が昇騰力を阻害された場合又は上げ材料が消散して相場が行閊へた場合などをいふ

肩代り（肩替）。

之は什手の手替となる場合とが又は思惑の逆になつた賣買の一方者が、受渡

……（一三五）……

米の實行が出來得ない爲、市場の有力者に其建玉を代つて貰ふことで、解合とは意味が違ふ、この肩替があつた場合には、大抵相場に變動が起る、又肩替となつた玉關係から相場の灰汁拔けとなることも多くある

……(一三六)……

堅い(堅し)。

強し、氣强しなどゝ同意で、相場の小高き狀態にあるをいふ

肩透し。

これは一種の作戰方法で、相手方に自己の思惑を過信せしめ、密かに手仕舞或は、逆仕かけの方針に出ることである

擔ぐ(擔ぎ上げ)。

相場の上騰步調をいふ

買人氣。

思惑熱の氣勢即ち買氣のあることをいふ

買慕ふ。

頻りと買たがる事で賣慕ふの反對である

買支へ。

相場の低落するのを買向ふて支へること

買材料(强材料)。

買建に利益となる原因のことで、例へば政府の買上米とか、實收額の減少などの類

買占。

暴利を貪らんが爲めに計畫される方法でこの手段としては隨分惡辣の策畧が用ゐられるのが常である、然し結局は不成功に終ることが多い

買順。

買付けの好機會、即ち、賣順の反對語

……(一三七)……

買過ぎ(買過ぎの反動)

調子に乗つて、豫想以外の買玉が建てられた事をいふのであつて、爲めに反動安の相場が出現することがある、(賣過ぎ參照)

……(一三八)……

買進む(買向ふ)。

買方が進んで買建をなすことで買向ふ又は買走りともいふ

買瀬切る。

一種の買防ぎであつて相場の低落を防止せんが爲に極力買建てること、略して買瀬るともいふ

買添へ(買添ふ)。

買玉が增加の傾向であること

買方(買人)。

買方とは買建を行ふ人々のことで、强氣筋、硬派などゝも同じ意味である買手筋(買屋)、などゝもいふ

買玉。

主として買注文のことを指す、略して單に玉といふ

買直し。

賣直しの反對行爲で、一旦轉賣した後ち更に買建を爲すことをいふ

買乘せ。

買思惑の適中した場合に於て更に向後の騰貴を見越し追かけ買をすることで即ち、利乘せすることである

買平均。

相場の低落によつて損失を生じた場合、其低落の度毎に買玉を出して損失の平均を得んとする手段即ち買難平(平均買)のことである

買逆ふ。

……(一三九)……

これも一種の買進みであるが、取引員が客筋の買玉に向ふことなども同意味に解せられてゐる市場もある

……(一四〇)……

買戻す(買埋める)。

轉賣に對する言葉で、賣建てある玉を買て相殺し、差金の受授を爲すことである

鎌入不足(鎌增し)。

鎌入とは米穀の收穫をいふのであつて、收穫前に謳歌された豐作觀が實收となつて減少したことを鎌不足といふのである、この反對現象が鎌增しであつて即ち豐作のつもりであつたのが案外によくなかつたといふのが鎌不足で惡い〳〵といはれてゐた作柄が左程惡くなく寧ろ思ひの外實入が多いといふのが鎌增である、この兩方面の反對作用によつて相場に大波瀾が起ることが常だ

瓦落(崩落)。

相場が暴落することをいふ

空賣(旗賣)。

米を渡す考がなくて賣付けることで、この反對に、米を受ける意思がなくて買つけるのが空買である、併し「旗」といふのは賣に限つてゐる言葉で、旗買といふものはない、旗賣連、旗屋など皆同意味である

空腹。

端境期のことで、順乘の年には概して端境高の相場となり、變乘の年は其反對に相場が下るといふ一說がある、空腹上り、空腹下りなどいふ

空廻り(出來不申)。

市場が不況の爲、賣買が折合はず、或る節に出來賣買が悉無であることである

……(一四一)……

搦み（内外）。

五圓からみ五十錢搦みなど〻唱へて或る相場の内外を指定する言葉である、例へば賣買の注文を發する場合に三十錢からみといへば三十錢内外といふことになるガル。

……（一四二）……

蠣殼町邊の常套語で、取引員又は類似業者が失敗して廢業した場合などを斯くいふ

合百賣買。

これは一種の賭博行爲で勿論所法に違犯するのであるが地方の取引所には餘り行はれず、主として蠣殼町市場などに其流行を見てゐる。これは一体ドンなものであるかといふに、一名寸丹と唱へ、昔の時米相場から胚胎したものであるが、普通或一人が各取引店類似業者の二階などに陣取つて薄資金の希望者を集め、一圓乃至二三圓位を賭け、取引所の相場を標準として勝負を爭ふのであつて、一例を上げて見ると當日の後場に五十錢の相場を賣買した場合に於ては、翌日前場各節の出來値段を平均して其平均が五十錢五厘以上となれば買方が勝ち四十九錢五厘以下であれば賣方が勝つといふ事になる、この合百には「早」、「幅」、「山櫻」、「アンコ」、「向ふアンコ」などの種類があつて、最も少量の金錢を賭けるものを乞食合百といつてゐる。この合百が餘りに流行すると時々其筋から手入されることがあるが、飯の上の蠅同樣で少しく其筋の手が緩むと又流行して害毒を流すといつた工合で容易に全滅しない

き之部

休會。

取引所の休業のことで日曜、大祭日及び年末年初の七日間は休會する、其翌

……（一四三）……

日を休會明けといふ

氣搆へ。

相場の騰落又は材料を豫期すること

氣重し。

場面ぼんやりのことで氣乘のないこと

聞きこみ(早耳)。

相場變動の機秘或は材料を人より先に聞えたことをいふ

氣崩れ相場。

人氣沮喪して自然的相場が崩落することをいふ

期近物。

當月限のことをいふ

氣先き。

……(一四四)……

人氣消長のことで、相場の定まりかねることを氣先案じなどゝいふ

氣乘薄。

人氣の引立たぬ事

氣直り(立直り)

低落せる相場が立ち直つて騰貴すること

氣丈。

景氣がよく相場が確りとしてゐること

氣配(氣配呆け)

相場高低の傾向、或は賣買思惑の狀態などを示すことで、休日氣配とか引跡氣配などゝいふ又氣配呆けといふのは相場の昇騰氣勢にあつたのが豫期に反して引立たないことで、畧して氣呆けともいふ

氣早筋。

……(一四五)……

四圍の事情などゝは沒交渉で只相場の足取にのみ付いて賣買をやる人々のこと

……（一四六）……

氣迷ひ（迷宮）。

相場の判斷が付かぬ爲め賣買を差控へる狀態にある人氣をいふのである、この氣分がだん〳〵濃厚になると遂に迷宮入りとなつて手も足も出ないやうになる

急放れ（急騰、急落相場）。

相場が何かの突發材料の爲に急に飛騰することがある、其反對に又急落することもある、かやうの相場は必ず近いうちに反動が起る

氣恁れ。

不良米の堆積或は其他の惡材料が潛在してゐる爲、賣買が進みかねる場合をいふ

逆行（逆相場）。

逆落とも唱へられ、高くなるべき相場が反對の徑路をとつて低落すること

逆指値。

賣買注文の一手段で、即ち逆の仕掛方を斯くいふのである、例へば、相場が三十五圓臺を下割つたら賣れとか又は三十六圓臺を突破したら買つて呉れと注文を出すこと

逆鞘。

當限より中限又は先限の方が高いのが普通であるのに、季節關係とか、人氣の作用などで反對の現象が起り當より、中、中より先限が安い場合をいふ

客筋（來客筋）。

取引員に對して米の賣買を依托する人々のことで其仲介者も取引員から見て客筋である

……（一四七）……

逆乗替。

乗替は普通當限から先物へ代るのであるが、これは中物又は先物の賣買を仕舞つて當物へ乗替ることで、受渡關係などから、かゝる手段を採る場合がある

玉(建米)。

玉は即ち賣買の建米のことで、この言葉を頭とする用語は、(一)玉を這はせる、(二)玉締り、(三)玉負け、(四)玉倒れ、(五)玉繋ぎ其他がある、(一)は大手筋などが自分の賣買を目立たぬやうに建てたことで、(二)は賣買が緊張した相場の強硬を意味すること、(三)は取組玉が多い爲め波瀾が起る場合、(四)は大手筋などが四圍の事情を顧みずして大玉を建てた結果、自縄自縛に陥ること、(五)は証據金不足の場合追証を提供して建米を維持すること等である

……(一四八)……

切る(手仕舞)。

切るは即ち手仕舞であるが、切られるといふと取引員から隨意に建米を處分された事になる

虚實過渡期。

虚といふのは人氣で、實は實性である、これは採算期から八月大海上に入るまでの道程即ち六七月頃をいふ

錦魚賣相場(金魚相場)。

初夏の頃金魚賣の出廻る頃は一般商況の不活潑時代で米相場も居眠りの狀態を示すことが多いといふ意味である

く之部

空相場。

……(一四九)……

……(一五〇)……

取引所の相場を基準として行ふ一種の賭博行爲で、相場の高低によつて損益の大小があるものと、或る相場の標準點を決勝するものがある、薄敷、合百の類が之に屬する

空米相場。

これは前項に異なる古來の慣習語で、米を受渡しするを目的とせず、差金を收得せんとする目的の賣買行爲、即ち一種の投機利用を謂つたのである

挫け(挫ける)。

相場が俄然低落の狀態を示すこと

崩れ(崩る)。

人氣沮喪の爲相場が低落すること

喰合高(取組高)。

玉の喰合た即ち取組んでゐる賣買高のことである、略して喰合(取組)ともい

ふ

喰退き(利退き)。

建米の利を入れて退く事、即ち利喰である

闇商内(暗相場)。

取引所の相場が立たない前のことで年末又は休會中の商況ことをいふ

關門(鐵門)。

峠の意であつて相場昇騰の場合に惱む箇所を斯くいふ

け之部

蹴落し(蹴こむ)。

相場低落のことで蹴破るなども同意味である

怪我。

……(一五一)……

相場に損失を生ずることで、財布が怪我した意味である　……(一五二)……

桁外れ。

採算外の相場をいふ

下駄を履く。

賣買の上前を刎ることで、成行注文などにはよくこの手で私腹を肥す輩がある

下落(低落)。

相場の安くなることで騰貴の反對語

限月。

清算取引の期限を有する月、即ち當、中、先限のこと

見當。

五十五錢見當などゝ稱して、相場の中値を推察する言葉である

こ之部

小強し(小堅し)。

相場が若干強いといふ意味で小辛いなどゝいふのも同意味である腰強、小高

小締なども畧同意

小甘し(甘し)。

相場に締りがなく稍低落の狀態のことで小緩、小弛、小安、小鈍し、小不味

ともいふ何れも同意味

小動く(小變動)。

相場が蠢動狀態で聊か動搖の態あること

小掬ひ。

僅少の利益に安んじて掬ひとること　……(一五三)……

小競合。

相場の變動が少なく往來狀態にあること

小直り。

相場の若干恢復の氣勢を示した事

小ズム。

相場が小巾になつて變動が見えない事こする。

所謂「チャブック」ことを斯くいふ

小底(目先底)。

相場の狀態が差當り最低位にある所をいふ

小巾往來(小往來)。

小變動を繰返して極めて小さき局限性の騰落を演じてゐること

小潰し口。

主として白米商のことをいふ

口錢。

取引員が賣買委托者から受くる報酬のことで卽ち委托手數料である、單に手數料といへば取引員から徵收するものゝことゝなる

公定相場。

單に公定とも稱して、市場に掲示せらるゝ賣買出來値段のことである

小口落し。

之は卽日の賣買を仕切つて尙殘存する同一取引員の買及び賣建の中で後日に至つて同限月の反對玉が生じた場合、其建玉の古い日附の方から順次相殺して行く方法で、一時は弊害があるといふことで禁止された、併し現今は復舊して差支へないことになつてゐる

焦合相場。

持合相場が一層膠着して變動しないことをいふ

腰入（腰入る）。

相場騰落の見込がついて突進することで、賣買に油が乘ることである

五月米。

五月は農家の播種期であるから當時の天候如何が期米に影響を齎らすことになる、それで五月の米界は一般が注意する

こじれる。

相場が一本調子でなく縺れて冴々しない事

後場。

米市場の午後の立會をいふ、普通午後一時から三時三十分位までゞある、この最初の立會が後場寄付、最後が後場止めである、略して後寄、後止といふ

……（一五六）……

殺す（殺さる）。

殺すとは相場の上で殺すといふ意味で卽ち大なる損害を與へたことである殺さるといへば主觀的意味となる

さ之部

差益（差損）。

差益とは轉賣買戻しで儲けた差金（利喰）のことで差損は其反對の差金（損金）のことゝなる

先限（先月限）。

三限月あるうちの一番長期のもの卽ち先物、又略して先ともいふ

先走る。

人氣が材料より先に走ること

……（一五七）……

探り合。

お互に相手方の意向を探合ふことで相場の變動が乏しいことの形容

……（一五八）……

下げ澁る。

相場が低落狀態にあつて下問へ下げ得ない形にあるをいふ

指値（指値注文）。

これは賣買注文の際に何圓何十錢と指定することで、又其使用期間をも指定する必要がある。有効期間を指定せないものは月が替ると自然取消となるが慣例である

樣替り。

相場の光景が一變すること（三十七項參照）

ザラ場。

各節々の間合に賣買することをいふ

鞘寄せ（鞘詰り）。

當、中、先の直鞘が縮少することをいふ

鞘甜め（鞘剝げ）。

上鞘であつた先限の鞘がなくなつたことを斯くいふ

鞘取り（鞘取屋）。

鞘取は普通期近物を買つて先限を賣るのであるが、さうと計には限らない、或は地場を買つて他の市場で賣るとか又は其反對に仕かけることもある、採算上の安全賣買であつて、危險がない處に其特長がある、常に斯樣の賣買をやつてゐる人を鞘取屋といふ

三五等（上下米）

これは主として新潟市場などに行はるゝ慣習的豫約賣買の一種で相場の大手筋が自己の建玉を保險する意味に利用する手段であるが、其期間は普通三日

……（一五九）……

である、これは相場激變の際などに大玉を擁護する上に於て極めて効果のあるもので、例へば甲と乙との契約期間中に契約せる値段の出現した場合は契約者は被契約者に對し自己の建玉を肩替りの方法によつて取引所の場帳に移し替るといふことになるのであつて極めて巧妙なる作用を有してゐる

……(一六〇)……

し之部

仕かけ(仕切る)。

新規の賣建て又は買建のことで取引員に依頼することをいふが、仕切るといへば轉賣買戻しのことである

次第。

場面成行次第といふ意味

下運(下押す)。

相場が低落することで下伸び、下向くなどゝもいふが、下飛びといへば少々大きな低落を意味する

下支へ(下澁り)。

下げさうにして下げ得ざる相場のことで下問の狀態にあるを斯くいふ

下値(安値)。

低落して其位置の低い相場の事卽ち安値をいふ

下放れ(下廻り)。

低落相場のことで主として前日の引値より寄付が安い場合をいふ、又下廻るとは以前にあつた安値より一層安くなつたことである

直キ(直キ屋)。

各地取引所の近傍に行はるゝ場外商内で、一種の賭博行爲である、この種の商内を取扱ふものを直き屋といふ

……(一六一)……

……（一六二）……

市場目付。

市場即ち米穀取引所の市場管理事務を採る者の事で、大市場であると、この目付が數人あつて市場を見廻つてゐる

沈む（沈靜）。

相場の低下して、沈靜の狀態にあること

仕手。

賣買兩者、卽ち强氣と弱氣、硬派と軟派である

自動的相場。

相場の狀況から見て何等の材料もなき際、自然的騰落を演ずる相場のことである

品攻め（證據金攻め）。

限月の受渡間際になつて賣方の渡米蒐集を不圓滑ならしめ一擧巨利を得んとする買方の策略をいふ又この反對に賣方が金攻めの手段を採ることもある、これを証據金攻めといふ

正米筋。

即ち正米賣買を主とす者のことで正米師、實彈者、精米筋などをいふ

尺進寸退。

一尺進んで一寸退くの意で、上へ長く、下へ短き相場卽ち上步調になる相場をいふ、この反對の言葉が尺退寸進である

順氣（好順氣）。

天候が良好なることで順氣譽めなど〻唱へ暗に豐作を豫想すること

順乘。

豐年凶にて古米が豐富であること（十三項參照）

勝負師（相場師）。

……（一六三）……

客注文の外に自ら思惑を行ふ取引員、又は思惑賣買專門の人々を斯くいふ

……(一六四)……

素人筋。

專門家以外の客筋のことで門外漢といふ意味ではない

新高値(新値、新安値)。

最近に例がなかつた高値、安値のことである

新甫。

各月の初めに現はる〻新規の先限をいふ

新穀季節。

新米の出廻る季節のことで主として端境後をいふ、其最も早く出廻つたものは新米の走りといふのである

す之部

辷る(辷り上げ)。

辷るは落ちると同意で即ち相場の低落をいふのであるか辷り上るとなると漸騰することを意味する、併し普通は辷ると稱して低落を形容するに用ゆる

筋(强氣筋、弱氣筋)。

筋とは手筋或は何々筋と稱へ、常に賣買する手口に命名した便宜上の言葉である

せ之部

節(節替り)。

前場、後場の中に數個區切つてある一定の立會時間である即ち前場二節、後場一節の如し、この節から次の節へ移るのを節替りといふ

……(一六五)……

糶上げ(競上げ)。

相場が漸次糶上げられて高くなること　……（一六六）……

前場。

取引所や賣買立會の午前中をいふのであつて、この立會の最初が前場寄付、最終が前場止である、畧して前寄又は單に寄ともいふ

全部解合。

賣買兩者が其全部の建玉を解合ふことで卽ち總解合の事である

そ之部

底（底値）。

底とは相場は最低位に達したといふことで大底又は底入ともいふ、底强し、底堅し、底近し、底値保合など何れもこの底卽ち最低位の相場を基準とした言葉である

底拔け相場。

底ぬけとは前項の基準を突ぬける形勢をいふのであつて底知らずなどゝも唱へ奈落の底點が見えないといふ意である

備へ米（準備米）。

受渡の爲、實米を準備した事をいふ

其鼻。

其氣先、其切つ先をいふ意で、「そこから」、「そのさい」などゝいふ意

算盤引。

相場の足取りのことで寄付値段と引値段の同一である場合をいふ

た之部

大海上（夏海上）。　……（一六七）……

八、九月中の純天災期のことで、この時代の相場は、常に大波瀾を赴す爲め恰も大海上を行くが如き感があるといふと所から斯くいふ……（一六八）……

大勢。

相場の當然推移する道程をいふ（十八項參照）

代用米。

各取引所に於て定められた準備米以外の米のことで即ち格付によつて代用を許した米

代理人。

取引員の行爲を代理する者のことで、全權利を委任せられたものと部分的代理を委任されたものとがある前者を本代理、後者を當日代理などゝ稱する、市場代人即ち賣買手振などいふ者は後者に屬する、取引員は普通この代理人を數名置く

臺。

相場稱呼の範圍をいふ言葉で即ち十圓臺と云ふは十圓九十九錢までをいふ

當限。

當月限り受渡を行ふ限月即ち期近物をいふ

高値（高場）。

相場の昂騰せる値段のこと、高場ともいふ

高歩調（高唱へ）。

相場が高足取になることで、氣配の良好であることを高唱へといふ

高なぐれ。

昂騰中にあつた相場が豫期に反して停頓の狀態を示したことをいふ

高値引け。

高値に引けた相場のことで、これと反對に安値に引けた相場が安値引である

……（一六九）……

高値米を呼ぶ。

……（一七〇）……

高値が出る場合には自ら米が集つて來るといふ諺がある

高張る（安張る）。

人氣が強き爲、實質以上の相場を見せることで、この反對に人氣が弱き爲、實質以下の相場を見せるのが安張り相場である

叩く（叩かれる）。

賣叩き又は、叩込むともいふ、卽ち相場を崩す目的で賣建をする一種の人爲的相場である

保合相場。

「モチアヒ」と稱し變動尠なく、大概同一の範圍に停滯してゐる相場の事である（二十一項參照）

ダレ相場（ダレル）。

相場が一向に引立たぬ狀態にあること

盥廻し。

籠ぬけ、筒ぬけなどゝも同意で一方に買建て又は賣建てゝ他方に反對の動作を採り密かに玉をぬけて仕舞ふことである

ち之部

中限。

中月期卽ち中物のことで翌月限り受渡となるもの當と先の眞中にある限月

中止（立會中止）。

取引所の賣買を一時止めること（六項參照）

近目取り。

取引所の出來高又は相場に接近したものを勝利者とする一種の賭博行爲

……（一七一）……

地場（地廻り）。

地場即ち當所の意味で、取引員其他專門相場師のことをいふ、來客に對する區別、（地場手筋）であるが地廻とは稍下等の相場師のことで取引所附近に巣ふ人達のことをいふ

地方筋。

地方の客筋のことである

提灯（提灯連）。

一定の方針なくして、有力なる相場師又は當り屋などの動作に附隨して賣買を行ふ手筋のこと、即ち附和雷動の思惑者をいふ

……（一七二）……

つ之部

頭打ち。

騰貴中にあつて相場が材料の缺乏とか又は反對材料の出現によつて行悶への狀態となつた場合をいふ

頭重。

（かしら重の項參照）

突上げ（突落す）。

相場が俄然昂騰を演ずることで、其反對の狀態を突落すといふ

月癖（日癖）。

月癖とは月柄によつて相場に一種の癖がつくことで、日癖とは日々の相場癖をいふのであるかゝる癖のつく相場は主として保合狀態にある場合に多い

月番。

取引員が順番に共同事務を取扱ふこと

附出し。

……（一七三）……

賣と買とを相殺する形に取引所の帳簿へ登記すること

……（一七四）……

ツケロ賣買。

成行賣買のことで、相手方が賣る丈け買ふ事又は買ふ丈け賣るといふ事をいふのである、相手になるからある丈け出せといふ意味

頭上。

天候のこと

突込賣。

突込み突込み賣ることである

突かける。

相手方の策戰に對抗して讓らない形容

繋き米。

手持の正米の損失を防がん爲定期に賣る事で氣預け賣りとも略同意である

潰し屋（小潰口）。

之は精米業者のことで、小潰屋といへば白米業者の意味である

強氣筋（弱氣筋）。

即ち相場の昇騰を希望する人々のことでこの反對者が弱氣筋である

強材料。

或は樂觀材料とも唱へ、直接又は間接に相場を昂騰せしめたとする原因資料のことである

釣り上げ相場。

人爲的に相場を騰貴せしむること

て之部

手張り。

……（一七五）……

取引員又は其代理人の自己思惑をいふ　……（一七六）……

手仕舞。

轉賣買戻しによつて賣買の建玉を切上げること

出合ふ。

即ち指値注文の値段が出合ふこと

出來不申。

略して不申とも唱へ、市況不振の爲賣買が纒まらなかつた事

出直る（立直る）。

低落の狀態であつた相場の形勢が一變して强硬になること

手詰賣買。

損益に拘はらず賣買を行ふことで主として買玉に對して用ゆる

天算時。

天候が縺れて日和がよくないなどのことから稻作が懸念され、相場が騰貴する狀態であることをいふ

天井（天井保合）。

相場の最高低を天井といふのであつて、天井値段、天井打ちなども同じ意である又天井保合といふのは相場が高値に保合ふこと（二十八項參照）

轉賣買戻。

賣買の建玉を相殺の理法によつて完了する行爲のことで賣埋買埋なども同じ意味である即ち受渡によらないで差金受授を行ふ巧妙なる手段

と　之　部

解合。

即ち賣買の解合を行ふことで、總解合又は一部の解合がある、これは相場の　……（一七七）……

變動が激甚である爲め受渡が不圓滑に陷いる場合などに於て賣買兩者が同意の上各其玉を解合ふ事である

……(一七八)……

同鞘。

各限月、主として中限と先物の鞘がなくて同一の相場をつけてゐることをいふ

動機待ち

機會がなくて手懸りがない爲め更に機會を掴んで出動せんと期待してゐること

ドタ(ドタ九、ドタ一)。

ドタとは丁度値段を稱する市場の慣用語であつて端數のつかない十錢丁度とか二十錢丁度をいふのであるが圓丁度のものは大ドタと稱する、又ドタ九といふのは圓丁度賣り、九十九錢買、若くは十錢賣、九錢買の氣配をし、ドタ一とは圓丁度買、圓一錢賣若くは十錢買十一錢賣の氣配をいふ

ドタ破(るドタ割る)。

圓位若くは十錢位を突發したのがドタ破りで圓位若くは十錢位を割つたのがドタ割れである、併し普通圓位のみに使用してゐる

飛び臺。

圓臺相場のことで例へで三十五圓一錢から九錢までをいふ地方により飛んテッパともいふ(飛んで端數のある意)

飛び〳〵デッパ。

相場呼稱のうちに零位の二個以上ある場合、例へば三十圓三錢とか四十圓四錢といふが如きもの、主として螺殼町邊りの用語

突飛相場。

暴騰相場のことをいふ

……(一七九)……

ドデン賣買。

ドデンとは買越、又は賣越の意で、今迄賣つた玉を仕切つて更に買ふのがトデン買越して其反對に買玉を賣埋めて更に賣建るのがドテン賣越しである、この行爲は餘程熟練者でないと危險が多い

……(一八〇)……

土用潰れ。

夏季の土用は米市場の書入れであつて其天候如何によつて相場が激變する、土用中降雨勝ちなどで惡い天候が續くことを土用潰といふ、土用入及二番、三番卽ち土用三郎といふ日柄は特に市場者の注意か拂はれてゐる

な之部

中稻。

早稻と晩稻の中間に於て豐熟する稻の事

投げ相場(投げ崩す)。

買方の嫌氣感などから手詰の賣玉を出した爲め相場の崩るゝこと卽ち投げ崩し相場である

なだれ。

雪崩の如く激落する相場のこと

泣く(泣き入る)。

相場變動の爲、損失を招き不得止違約するやうな場合をいふ

惱む(上惱む、下惱む)。

相場が上伸もせず、又下押も出來ないで稍停頓の狀態を示すことをいふ

馴れ相場(馴れ)。

標準相場のこと又平均相場をもいふ

……(一八一)……

軟弱。

相場の不活潑なる景況

難平賣買。

相場の大勢に逆行する意味で損失の建玉を平均せんが爲に低落若くは昂騰の節々に建玉を增加する一手段、これはしくじると大損害を招くことがあるから餘程相場に熟練せなければやれない

成金（出來星）。

一攫萬金を利して俄かに分限者となつたものの意で、將棋の歩が金になつたといふ意味から出た言葉である、又出來星ともいふ

に之部

庭際き。

玉の減少した場合をいふが、本來は正米市場の在荷減少してゐることをいふのである

二番底（二番天井）。

一旦底入となつた相場が更に低落して底値に近い安値を付けた場合を云ふのであつて二番天井とは其反對のことである

庭帳。

即ち場帳の事で取引所の賣買登記簿のことである

入津米。

主として海運によつて市場へ這入る米をいふ

人氣。

即市場の景況、動靜の氣配である

ぬ之部

拔け解合ひ。
一部分の米を解け合ふことで同意上の部分解合をいふ、貫ひ米ともいふ

拔ける。
利益のある建米を手仕舞ふこと

ね之部

値段賣買。
賣買を實行する頃合（潮時）のことで値頃思へなどゝもいふ

値段（値幅）。
値段とは賣買玉の代價のことで値巾は値段變動の差のこと假令ば一圓巾、三圓巾といふも同じ

熱心筋。
賣買の何れかの一方に熱中して固守する手筋

値惚賣買。
相場の値頃にのみ沒頭して、他を顧みず、賣買を行ふことで、つまり相場の位處に惚れて賣買すること

の之部

伸び相場。
相場の騰貴すべくある狀態

伸び兼。
伸び惱むと同意で相場の伸力が鈍き形容

殘り玉（ざんぎよく）。
即ち取組高のこと